

天
月
端
日
記

特260

46

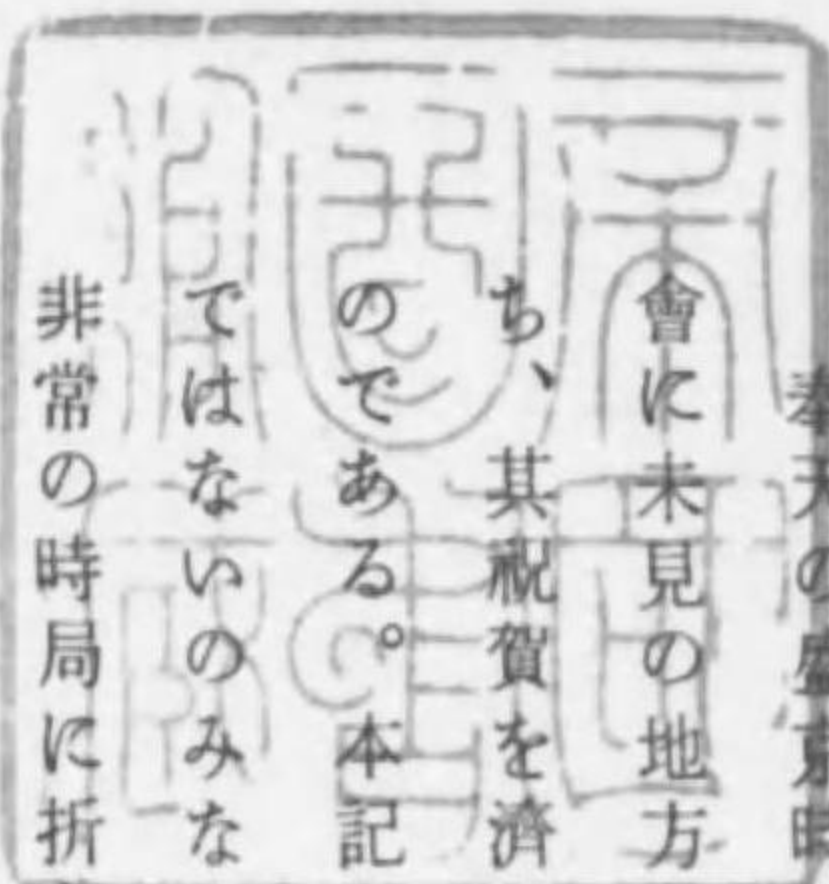
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

始



はしがき

奉天の盛京時報が今度一萬號の祝いをするから私にも出て呉れと案内して來たので、私も此機會に未見の地方をも見、又た、ま一度滿洲の全貌を見直して置きたいと思ひ、五月十二日家を立ち、其祝賀を済してから同社の篤い配慮と滿鐵の御世話で諸方を旅行し、七月十二日家に歸つたのである。本記行は其間に聞見した事や其感想を記して置いたもので、素より人に示す程のものではないのみならず、私の性格としてそうした言議を發表するのを好まぬのであるが、併し此の非常の時局に折角其の爲めに旅行した記録を古紙の中に葬るのも心なく、此の長夜燈火に親しむの秋、諸賢の一讀を得ば、他山の石も或は何等かの参考ともならんかと竟に印刷に付した譯である。



顧ふに凡そ國家の興亡は、人と物との總合と否とに關係を持つは固より論を待たざるところである。若しも今回の支那事變に當つて滿鮮が我が手中に無かつたとしたなれば、今日此れ丈の戦果を擧げ得たであらうか。曾て故寺内伯が日露役の直後しみじみと「國土が小さくては兵財共に困窮する。そこに領土増大の希望も起る譯で畢竟國家生存上止むを得ぬ要求である」と述懐したのを聞いたが、當時伯が如何に其苦境を體驗したことであらうと、今日に至り追想に堪へぬ次第である。私が今回老軀を提けて滿洲の見直しに往つたのも、故伯の遺意に鑑みて、大體滿洲には今後どれ丈の資力を有するか、我移民をどれ丈に入殖し得らるか、又た入殖した移民が故障なく定着し得るかを観る爲めであつて、小利害の穴探しをする爲めではなかつた。而して私は此の視察から得た見地に考へて、此の事變の終局を收拾するには、□□以北を領有若しくは委任統治の下に收めて其以南を凡べて支那政府に解放し、且つ我國は大局的緊要なる條件の下に主に經濟上の提携に止むるのが今の時局に對する賢明な政策なりと主張したのである。故らに棚の上

に棚を吊るやうな二重政策は始終紛擾を生ずる基であつて、却つて永久の和親を傷ふものと思ふのである。随つて此局面轉換に就いて、我が聲明の手前をどうするかと云ふ問題も起るであらうが、何れ漢口陥落後に係る問題であるから其時に至れば左程苦慮するに及ばぬことゝ信ずる。兎に角大局の潮合を見て此の戦局に見切りを付くるのが政治家たるものの要諦であらうと考へるのである。以上の卑見は此旅行記と餘りに縁の遠ひやうであるが、詮するに私の此の旅行に付ての一片の婆心は全く此に在るので、若し誤見であつたなれば諸賢の叱正を待つと爾云。

昭和十三年九月

八十の老書生

中 島 眞 雄 謹 白

双月旅日記

中島眞雄

五月十三日（金） 晴

午前九時燕號列車で原千代吉氏随伴東京驛を首途す、緒方三浦安藤片谷等諸友と分手し沿道の新緑を賞しつゝ午後四時廿分京都に下車瀬戸君に迎へられ旅館柘屋に入る。此晩宿の女將に案内せられ南禪寺の瓢亭に晚餐を取り歸途鴨川踊を観る。皆な瀬戸君の好意に出るもの。

同 十四日（土） 晴

平安神宮、永觀堂、南禪寺に詣り亡友旭谷君の靈前に焼香して四時京都を立ち芦屋の瀬戸氏宅

に入る。

同 十五日(日) 曇

午餐後瀬戸氏一家と大坂天王寺公園に開設中の白隠禪師書畫展覽會を観る。出品中細川侯の所藏に係る出品殊に目を惹く歸途美濃吉に食事を取り九時芦屋に歸る。

同 十六日(月) 曇後雨

午前大坂に山田瑞祥堂を訪ふ原氏は土佐光芳筆人丸像外一點を求む。そこより雨中住吉社に詣し晩に鳥井信次郎氏の招宴に大坂北濱の花外樓に臨む。私の爲めの送別宴であつた。

花外樓は故木戸松菊先生の命名で其扁額は先生の筆になるものこゝは明治八年大坂會議の開かれた家で我が維新後に於ける重要な歴史を語るものがある當時井上馨侯の肝煎で大久保甲東侯は

東京より木戸先生は山口より而して板垣伯は土佐より共に此に會合して征韓論争乃至は征臺事件よりの成行を一掃して今後に對する國策を協議した結果木戸先生は新たに内閣顧問に板垣伯は參議に復任するに至つたのは此會合の收獲であつて後年西南の役に際して内閣の動搖を見ざるも此の爲めであつたと思ふ。當夜は樓の主婦よりも松菊先生の書など持出し聞き傳へた事など語るのであつたが私の舊聞する處によると元と此の家は兵庫の鍋屋と云つて何時の頃からか毛利藩の用達を勤め維新前長州出身の勤王志士に加擔した廉を以て幕府より家産を沒收せられて當主千崙彌五平は一時長州に亡命して居たのであつた。其後王政復古の運に會し伊藤侯等の世話で神戸に漁船運輸業兼御用旅館を開き當時海岸の千崙と云つては海内屈指の大旅館であつた。私も少年の頃には親戚に伴はれて一二度此に宿泊して其盛時を目撃したものである其後明治廿八年三浦觀樹翁が廣島に囚はれて居た頃彌五平氏は態々見舞に遣つて來て私が面會した事がある其時は氏は千崙何某と六ッ敷しい名前で宮内省奉仕の神戸御用邸の掛り官であつたことを今でも私は記憶して居

る。偕て當夜十一時鳥井氏及び樓主等に送られて下ノ關行き列車に投じ瀨戸氏同行大坂驛を立つ。

四

同 十七日(火) 曇

朝九時馬關着後直に關釜聯絡船昌慶丸に上船、海上穩波に送られ同日午後六時釜山着同五十分奉天行列車に投ず車内混雜不潔甚だし。

同 十八日(水) 曇後雨

一夜を汽車内に送り此日午後三時安東驛に着く。途上所々で砂金採取機の活動を觀る。該機が地盤を根底より破壊する景狀には一寸一驚を喫した。又た從來の鴨綠江鐵橋の外に之れと相并行して新たに一基を新設するのを觀る、やがて奉天驛に着き盛京報社同人及び知友多數の迎接を受け瀋陽館に入る。

同 十九日(木) 晴

奉天神社參拜後盛京時報社に挨拶し鐵西工業地區擴張(新に貳百萬坪を加へ總坪五百萬坪)の狀況を觀。夕刻金六亭の舊友懇和會に臨む。會者卅餘名、中には私と共に奉天在住卅餘年を閱した人々もあるが此種の會合に其都度會者の數を減するは人世の如何に寂寥なるかを感じるのである。

同 二十日(金) 晴

此日徐州陷落の勝報に接し次いで奉天博物館を觀る。館の主事小平總次君懇待至到なり。聞く此の博物館は元と熱河都統湯玉麟の私邸であつて其設計工作は皆獨逸人技師の監督になるもので如何にも構造の沈着宏壯で且つ其間取りが恰も博物館其物の爲めに建造したるの觀がある。内部の造作は滿洲事件勃發の爲めに完成に至らざりしを滿鐵會社が工費四十餘萬圓を投じて現在の如

く之を整備したと云ふ。而して陳列の主なるものは玉麟が熱河宮殿より或は其附近のラマ寺より羅致したもので多くは乾隆美術に係り其他は張學良の所藏品若しくは遼金時代の出土物を本館が購入したものより成る。正午小平君の馳走で河南料理の午餐を受く。

六

同二十一日(土) 曇

染谷君經營の渾河堡の農場を観る。一行は瀨戸大橋染谷及私の四人で撫順線の楡樹台驛に下車約一里渾河河畔にあり、面積は我拾八萬坪即六十町歩で最も地の利を得た熟田である。現在は十八町六反を自作とし餘を小作に出して居るが小作料は一天地即ち我六反に付き年二十五圓である而して自作は即今試験中ではあるが傭農夫四人給料一人に付き月十五圓で食費は其内で唯燃料を支給するのみ。外に馬三頭及騾一頭を使用すると云ふ。同夜染谷氏宅の晚餐會に招かる。

同二十二日(日) 曇晚に小雨あり

朝八時釜山行列車に投じ菊池氏の連山關の別墅に向ふ連山關は奉天より汽車で三時間海拔一千貳百尺夏季は小學兒童の避暑地として撰ばれた保健地である。現在邦人六百餘。外に鐵道守備隊一個大隊が駐屯し山に傍い水に臨む景勝の山間部落であるが、一方遼陽に通ずる街道を有し摩天嶺方面より流るゝ川と草河口方面より流るる川とが合流し、其兵營の前に架する橋を摩天橋と云ひ、其下流の南坂は大倉組の經營に係る南坂鐵鑛の所在地で現に其業務を擴張し從來の運鑛輕便鐵道を本鐵道に改築中であつた。こんな山間部落でも居留邦人中には粒々辛苦で富五十萬を有する資産家もあり、又た現に菊池君別墅の隣家に住む夫婦ものの豆腐屋は九州邊の人らしいが、是れも三十餘年始終兵營に出入して僅か豆腐の御用で現今拾五萬圓を下らざる富を成して居ると同君の話であるか、日本國中の豆腐屋に他に別の稼業あるものは別として、現金十五萬を有する豆

七

腐屋は恐らく稀有であらうと思ふのである。尙ほ此の類の成功者は滿洲には外にも多分あるであらうが、畢竟國の發展に伴ふ特産品で、古語にも衣食足つて禮節を知ると云ふて居る様に此等の人が其家道を向上し我鴻業の隆運を補はんことを私は願ふて止まぬのである。世には一部の落伍者の言を信じて大局を透見するの明なき偏見論者も往々見受るが、私の左袒せざる處である。此の夜此處の丁香廬に宿す窓外杜鵑頻りに鳴く。

同 廿三日（月） 曇

午前十一時の列車で歸途に就く。途上宮ノ原新市街工事の狀を観る。宮ノ原は舊の平頂山驛で近年宮原と改稱したのである。蓋し其の名稱を改めし所以は日露戦役に當たり我閑院宮殿下が騎兵第二旅團を率いさせられ明治卅七年十月十二日露軍の側面を脅威し、爲めに敵の遼陽回復戦を不能に歸せしめ此戦役に偉功を立て玉いし戦蹟であるので其紀念として斯くは改稱したのである。

該地は太子河に沿ふて平坦に開けた耕地で近時本溪湖の發展に伴い其市街の狹隘となつたので此の計畫を進めたものである。將來安奉沿線に新興都市の出現を見るも遠きにあらざるべしと思ふ。午後三時奉天に歸る、此日瀬戸染谷二氏新京に行く。

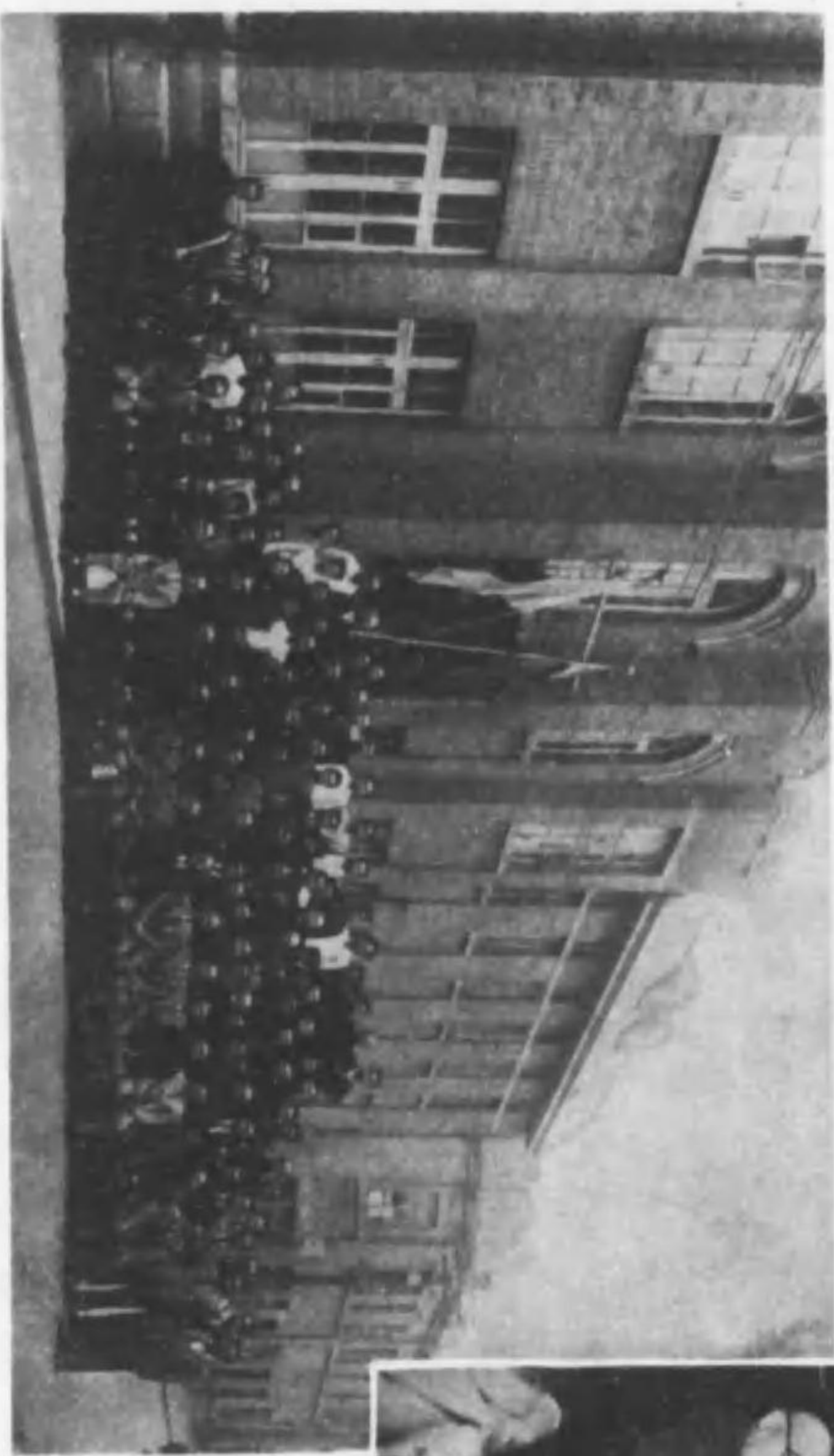
同 廿四日（火） 晴

朝小平君來訪、十時より菊池君と重ねて博物館を観る。主に湯玉麟の熱河省より齎らせる國寶遼金帝后に係る數種の頌德碑の原石と、張學良所藏の書畫とを再検討せんが爲めであつたが、先年坂西中將の企圖で東京に開かれた支那古書畫美術展に張學良の出品であつた沈石田の山水卷等の神品は遂に一點をも見當らなかつた。それでも多數の收藏中に黃鶴山樵王蒙の層巒蕭寺之圖、谿山高陰之圖。石濤和尚の破墨山水、梧桐人物、揚文總の畫卷、祝枝山の便面等は直筆であらうと思ふた聞く所に依れば彼は北京滯陣中相當鑑識を有する人を介して古書畫古玩を収集したと云

ふのに、今日観た處を以て察するに騒亂の際に散失したのか、又は彼が某外國銀行に托した保險料の仕拂は可なり多額であつたと云ふから、或は其方に保管してあるのかも計られぬ。午後石田鶴岡川本諸氏來談。六時より松岡總裁の招宴に往く。菊池貞二鶴岡永太郎兩氏も同席で暢談夜半に及ぶ。

同 廿五日（水） 晴

川本靜夫君の大同製藥所を観る。就中ヒマシ油製油業は私の嘗て耳にせざる發見であつた。川本君の云ふには此原料は支那語で大麻子と呼ぶ滿洲に野生する一年生の草實より搾取するもので從來は藥用のみ専用せられて居たが、現時飛行機の機械油としては缺くべからざる重要な役目を持つ必需品となり、其製油は直に官納するので目下は他に販路を求むる心配もなく、又た其精は肥料兼防蟲劑として漸く農家に認められ其販路を得るに至つたのである。又云ふ此の大麻子



影 像 念 紀 號 萬 一 報 時 京 盛



集 小 部 幹 社 同

油は滿洲の農家では古くから冬期になると馬車の機械油が普通油にては凍つて用を爲さざるので此の油を作つて使用したことを近頃に至たりて始めて知つたと呵々大笑した。此日石田君の新宅を觀、よね屋で午餐の饗あり、晩に金六に於ける盛京時報壹萬號の祝宴に列した。

同 廿六日（木） 晴

朝、大同新報の大石智郎君來奉せり。此日私の北支入關の證明手續きを爲し大義寺に對支先烈の供養塔の建設工事を視察して後、盛京時報關係大衆と同社前に於て撮影し晩に其の懇親宴に臨む頗る盛會であつた。

同 廿七日（金） 曇後風雨

此日海軍紀念日、午後二時發染谷君同行で大連に向ふ。沿道四年前に比すれば進歩の狀況面目

を改むるの觀あり。普蘭店通過の頃より風雨大に到り八時大連に着き、藤井滿鐵秘書に迎へられて雨中遼東ホテルに入る三浦矢一來訪晚餐を共にす。

同 廿八日（土） 雨冷氣如秋午後晴

高柳保太郎中將を其宅に、藤井滿鐵秘書を本社に、村田懿磨君を滿日新聞社に訪ふ。正午高柳氏の招宴に臨み下午岩間徳也、松浦與三郎來訪。晩に東萊館の滿日村田君の招宴あり、殊に私の希望で村井啓太郎、濱村善吉、兩君の來會を求め久瀾を叙したのは頗る私の欣慰する所であつた。

同 廿九日（日） 快晴

十時藤井秘書役の出迎を受けて染谷君と星ヶ岡の總裁社宅の午餐會に臨席した。筑紫熊七、高柳保太郎兩中將松崎圖書館長、村田滿日社長の一行である。特に三浦矢一を加へたのは松岡氏の



滿洲日日社訪問

松岡總裁招待會



用意懇到な所で誠に感謝に堪へない。同人は故觀樹翁の嫡孫で其箕裘を繼ぎ學校卒業の直後滿鐵に入り現に大連驛の助役を勤務してゐるのである。午後電氣遊園の故柏谷陽二君の建碑除幕式に臨む。碑の構造は實に莊重で今までに滿洲で此種の建碑は始めてであらう。且地を電氣遊園内にトしたのも頗ぶる其當を得た企である。其碑文にも概略は記してあるように此の電氣遊園は君の開創したものであつたからである。而して君の本園を起した資金が獨乙の製造會社よりのコンミッションに依るとは云へ其全部を投じて斯道の表顯に用いた其居心の光明なのは誠に後人の龜鑑とすべきである。君は山口縣の人、進十六翁の二男で翁は縣治の初め山口の四傑と呼ばれた人であつたが君も亦た其天資、一生を技術者間に置くのは惜しい一人であつた。

此日染谷君と市内及近郊を一巡し特に伏見台の整備發展には驚いた。大連は最早三十餘年の經營で何と云つても滿洲では他の地方と違い植民地臭い感じを脱して落付のある基礎を築いたのであるから滿鐵本社の奥地移轉の噂さ位で腰をぬかすような事はあるまひと思ふ。

同 三十日(月) 晴

岡本理治、濱村善吉、佐藤長治、縣監、濱岡福松、の諸氏來訪。十時特急亞細亞號で大連驛を立つ、驛頭松岡總裁其他諸友に分手して高柳中將の新京行きに同車し午後二時奉天驛に着く。

同 卅一日(火) 雨冷氣甚し

今日熱河行の日菊池貞二君、染谷君に代りて東道。夜半十二時三十分啓行。雨中中川芳三郎君奉天驛頭に送らる。

六月一日(水) 快晴

半夜車中に睡過すれば翌朝八時錦州驛に着く。列車は此處より錦承線に入るので私に取つては始めて未見の道程を経る譯である。錦承線は錦州省の錦縣より熱河省の首府承德に至る四三七軒の間を云ふのであるが、昨年更に承德より古北口を経て北京に至る二五五軒の承京線が開通されたので、此行以上の新線路をも踏査せんとする希望を起した。

錦承線は大略大凌河及び灤河の本支流に沿ふて開通され山又山の間を駛走する鐵路であるが、それでも私が豫想したよりは處々に平坦の農耕地があり、且つ義州、朝陽、凌源、平泉、等の名邑の多きには驚いた程である。錦縣より五十軒に義州がある。現時義縣公署の所在地で記録に依ると人口三萬を有し城内の大佛寺、佳福寺は遼時代の創建で又た城外の闔山は遼陽の千山と并稱せらるゝ滿洲の勝區で佛像及び耶律楚材の墓がある。南嶺のトンネルを過ぎて金嶺寺驛より北票炭鑛の支線がある。北票炭鑛は埋藏量二億噸と稱し京奉鐵路局の所有であつたのを今は滿洲國に接收し現在一日一千噸を採炭し居ると云。朝陽は錦州を距る一三五軒、古昔燕の龍城の地で隋唐時代には長城以北を統治する地方行政の中心地で其時代の磚造城壁の遺趾が今尙存して往時の壯觀

を追想せしめ、降つて遼金に建てられた有名の三座塔は今は其二基を存じ巍然たる百五十餘尺の雄姿は契丹文化の盛時を物語るものである。尙ほ清の乾隆帝欽定の佑順寺は現寺喇嘛僧二百餘人が安住し奉天以西では最も完備した寺觀で仁王像の彫刻は特に有名である。此地は大凌河に枕し右岸に鳳凰山聳へ一見して要勝の地たるを知り且つ附近一帯地味肥沃、高粱、大豆、粟、の産物があり又た金、銀、石炭の鑛山を有すと。現時人口三萬邦人の居留者も一千人を數ふと云ふ。而して大凌河支流河畔に熱河戦争の犠牲となつた志士石本權四郎君の殉國碑が建てられて居る。葉柏壽驛は朝陽を距る八五杆赤峰への分岐驛で、錦承線が敷設されてから交通の要衝となり移住者も劇増して即今新市街建設の途中にあり。邦人五百を越へ日本領事分館、滿鐵醫院等がある。赤峰に至る一四七杆。

凌源は葉柏壽驛より三十一杆承德、朝陽、赤峰、凌南に通ずる古き歴史を持つ要區で現に農産物の外牛、馬、羊、豚、及び其皮革豚毛、藥材等物資の集散市場で特に此地は比較的高溫である

ので果樹の栽培及び管内には廣く絹紬を産すと云ふ。戸數三千、人口一萬四千、を有し内一千は邦人の居住に係り、現時熱河省凌源縣署の所在地である。尙ほ此地の東北長壽山に元の康太眞の墓碑及び李察の利州長壽山玉景觀の碑があり、又た月華山には高さ一丈五尺の石寶及び林泉寺碑等がある。而して考古學上近時天然保護物に指定せられた魚の化石層があると云ふ。此の邊より熱河阿片の栽培が盛んである。揚樹嶺トンネルは大凌河の流脈と灤河の流脈との分水嶺で大凌河は通航不便であるのに反し灤河は昔より永平、灤州に通航して今猶ほ關内との運輸交通に資して居る。私は曾つて朝鮮の使節が熱河の避暑山房に乾隆帝を請安するに陸路滿洲を経て灤河を溯り熱河に入る旅行記を見た事がある。

平泉は承德に入る一〇七杆前で、赤峰街道に當たり一面又た長城の喜峰口に通ずる要衝であるので、早くから漢人が移住した土地で市街は灤河の支流に沿い一寸此邊では珍らしく煉瓦造り瓦葺きの商戸が細長く櫛比して居る。農産物の外、燒酎、毡靴の製造等があり特に「阿片の平泉」

と呼ばれて阿片の栽培は省内第一位で特に平泉縣署の所在地で人口三萬、邦人の居留者も復た一千人を數へ赤峰と共に省中の中心市場である。下坂城驛邊より灤河を上下する船舶の往來するを觀たが船は大概長さ五六間巾三四尺位で舵手一人操手二人一本の帆柱を有して居る。大概下航は灤州に到る五百餘支里を常水時には二三日を要し途上最も風景に富むのは下板城より喜峰口を過ぎて撤河橋に至る間で山岳崩立奔流あり滯あり詢に旅客の探勝に價する舟行なりと云ふ。

之に反し溯江には長城以北を曳航するのに多くの勞力を要するのみならず早くとも七八日の日を要する不便ある爲め、近時當局に於ても本水路が渤海灣と直接の交通路となつて居る點に鑑みて此の不便を緩和せんとする計畫ありと聞く。

八時承德に着く。驛頭に滿洲通信社支局の柴崎鐵二、熱河新報の尹怡恩兩氏迎接、承德ホテルに入る此夜熱河省長官房の山崎誠氏來訪、氏は故漢口領事山崎桂君の令息である。私が承德滯在中は省の自働車を供用せられた厚意を鳴謝する。

同二日（木）晴

午前柴崎氏の案内で菊池君と離宮及び寺廟等を觀る。餘りの荒敗に坐る其盛時を追想するものがある。蓋し英主康熙帝が即位の十六年に塞外を巡狩して初めて此地に駐蹕し、後遂に行宮を造營するに至つたのは誠に深謀の存する所である。爾來帝は毎年一回必ず此に行幸し且つ木蘭園場に卷狩を催ふせらるゝのが恒例であつたと云ふ。無論其駐蹕中は内閣を移さるゝのと、蒙古王公、外藩使臣等の朝覲するので名こそ避暑山莊であつても其實北京の陪都とも云ふべきであつた。而して其皇孫の乾隆に至たり清朝極盛の勢を負ひ、且つ萬事が派手な上に熱河離宮は帝の生誕地であるので（乾隆帝は熱河の獅子園に生る）其規模を積極的に進めたものであつた。當時の殿閣、寺觀及苑囿の結構は世に既に記文、圖畫等に詳細記載せられてあるから此には省略するが、兎に角在位六十年八十五歳で崩御せられた間の離宮及承德府の繁榮は實に想像に餘りあるものである。然るに嘉慶以下歴代

の天子は曾て祖宗の遺謀を放置して顧みず、随つて熱河離宮は唯名のみ存在となり、而かも咸豐十年英佛聯合軍が北京を犯すに當り、皇帝此の地に蒙塵せられて流石英主經營の遺蹟も遂に不祥を印するに至つたのである。如上の状態に壯麗を極めた宮殿も寺廟も所藏の寶物も多くは此間に荒敗散失した上に民國となつて更に其度を加へたものである。尙ほ私の記憶に依ると、袁世凱の大總統時代熱河の離宮及び奉天の故宮に貯藏せし文津閣(熱河)文策閣(奉天)の四庫全書其他の寶物を悉皆北京に回収したことがあつた。其當時の熱河都統は熊希齡であつて、其回送途中で目星しい寶物が三四十箱紛失して一時疑獄騒ぎが起つたが、支那の事として遂に此件は有耶無耶に葬られて寶物は其儘煙に卷かれて仕舞ひ、其内奉天四庫全書文は後に張作霖の大元帥時代になつて再び奉天に取戻すことを得た。斯く熱河離宮の寶物は大略無くなつた上を湯玉麟が在任中更に其殘品をかき集めて奉天の私邸に持去つたので今日では一物も留めざる空殿となつた譯である。私は今回離宮正殿の傍に新築せられた小さな熱河寶物館の藏品が餘りにも貧弱なるを見て如上の事實を確か



承德全景



朝陽三層塔



承德金殿



樓河下り



古北口

興城溫泉



めたのである。

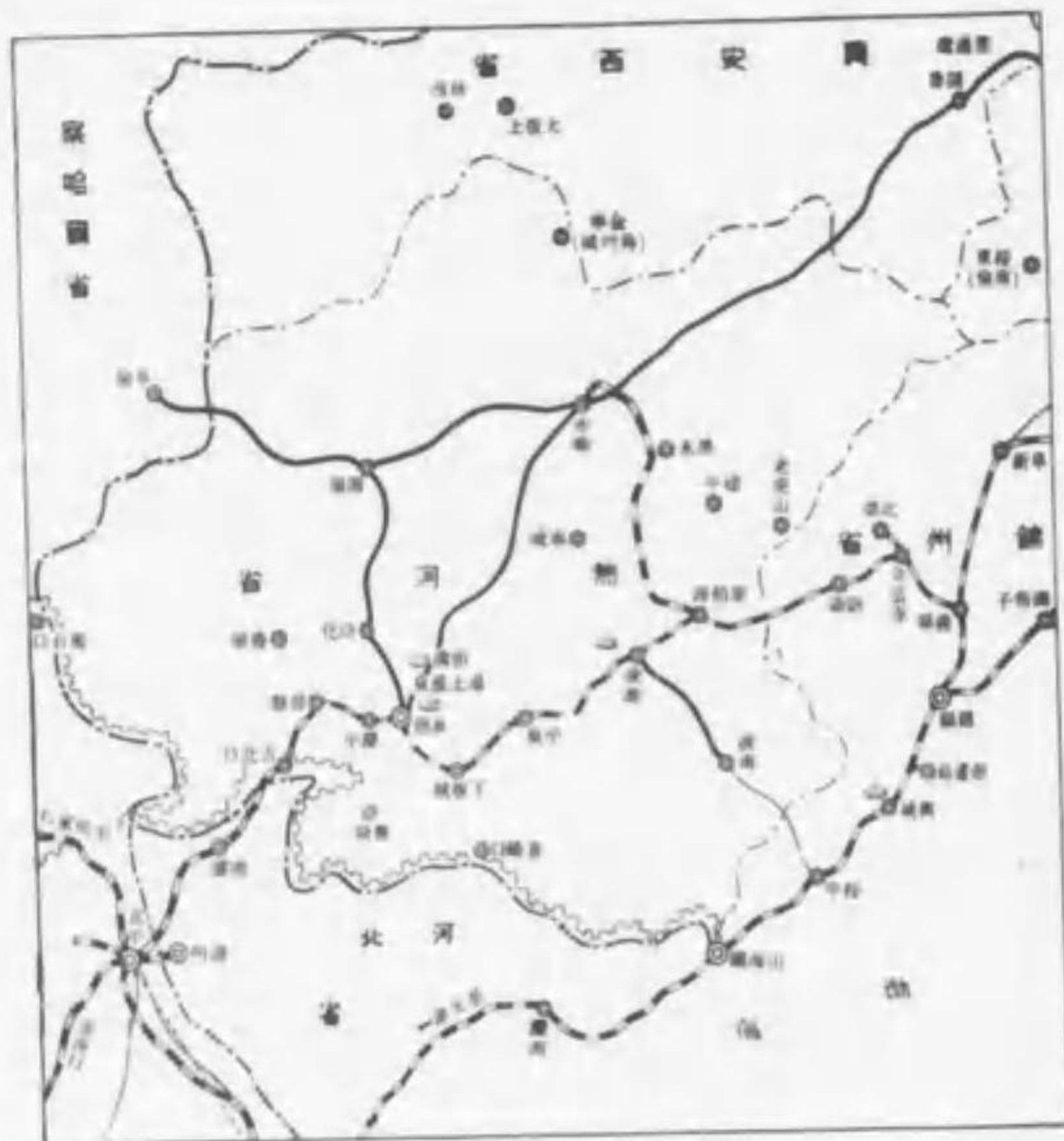
斯く云ふとも今日承德の美術が皆滅に歸した譯ではなく、其の持運び得られなかつた幾多の重要建造物及び佛像等の尙ほ存在して居る限り當年の豪華を語る乾隆美術の大觀として熱河の勝蹟を誇るに足るものはあるので現時政府は十ヶ年の繼續事業として毎年十萬圓の國帑を支出し其修繕の途を講じて居ることであるが、就中其の宏壯豪華を歌はるゝ八大處即ち普寧、宗乘、福壽、安遠、殊像、溥善、溥仁、廣緣の諸寺及び三寺の普樂、羅漢、廣安、は何れも各異なりたる由緒歴史を持つものである。

承德の市街は今は熱河省の省公署及び各機關の所在地で人口四萬七千、我が邦人及び鮮人も合せて四千餘人を有し、東西約五支里南北四支里の小都市で滦河の支流武烈河と離宮とに沿ふて建てられた、陰山山系を以て圍繞する溪谷であるから、奇峰連亘、山の景色には最も富みて居るが他の支那大陸が持つような博大の觀はない。住民は熱河離宮の創建せられた當時河北山東から移

住して來たもので、其關係から土地の通用語は多く河北の玉田縣地方の發音を操せりと云ふ。産業は木机、燒酒等位で、以前は京津地方の阿片買入商人に依つて生計し居た状態で賣笑婦の多いのも其爲めである。元來が熱河全省は其の面積九萬九千六百方秆で我が九州、四國、及び臺灣を合せた面積と略同じ廣さを持ち、戸數六十三萬八千、人口三百十萬を有し承德、灤平、隆化、豐寧、圍場、赤峰、凌源、平泉、建平、寧城、凌南、青龍、の十二縣と興隆辦事處、蒙古七旗公署とを以て省を構成する一種の行政を布き、其歲入は湯玉麟時代苛斂誅求を極めても尙ほ六百萬元を出でざる身代で、而かも其多くが阿片の收入であると云ふ。言迄でもないが熱河省は東部内蒙古の一部で曾て漢民族の越境は封禁してあつたが、此の百年來其の自由侵入が劇増して來て今では其人口の多分は漢民族の占むる所となつて其耕耘生業が蒙古の放牧生業を漸次に北境に壓迫したのである。而して本省生産の主なるものは漢、蒙、を通じて阿片、穀類、棉花、煙草、麻、藥艸、牧畜、養蜂等で就中阿片は全滿洲の阿片産額の三分二を占めて居ると云ふ。私はまだ本省の

統計を見ませぬので詳細の事は知りませぬけれども、概観するに本省の可耕地面積は全面積の九分に過ぎずと云ふので、此農業方面の將來には大なる希望を持つても其限度が知れて居るやうである。そうすると熱河開發の鍵は近頃問題視されて居る地底に埋藏する鑛産の確否に集注し、他の一は興安四省と共に畜産の改良に歸する譯ではなからうか。私は熱河繁榮の爲めには豊富の鑛産を掘當て又た優良な畜産を出して欲しいと祈るのである。

如上是私が熱河の開發に就いて經濟的に一瞥した觀察であるが、一面更に眼を轉じて此地が政治上如何なる關係に置かれてあるかを検討すると、地圖の示す如く南は長城を隔て、河北省に接し、西は察哈爾、綏遠に連らなつて外蒙古の衝に當り、北は興安四省を抱いて本州の中心を保障し、東は錦州を通じて渤海に臨み、其地位は滿洲西南の生命線と云つてよいのである。昨年既に承德より古北口を出て通州、北京に連接する京承線が架設せられ、尙ほ近く通遼より開魯、赤峰、承德を維ぐ一線を布設して此京承線の機能を完成する計畫があることを聞くが私は赤峰、圍場、



承德、圍場、の兩方面より多倫を経て張家口に至る鐵道を布設して大同、綏遠の線に合するを政治上及び經濟上更に緊切なりと思ふのである。それに本線が多倫まで出來ると既設の錦承線（錦州承德間）其支線の葉赤線（葉柏壽、赤峰間）を通じて多倫地方と壺蘆島の新築港との間に通商關係を生ずる新風潮を促すに至るであらうと考へるのである。

熱河は元と民國になつても滿洲とは別個の關係に置かれて居た所であつたが張作霖が中原に野心を抱くやうになつて屢々兵を關内に出すに當たり、

此方面が他人の管轄下に在つては用兵上の不利は勿論山海關の險要さへ常に其背後を衝かれる恐れがあるから彼が蒙疆經畧使及び大元帥時代に其幕客の閩朝璽、湯玉麟を前後に熱河へ据た譯であつた。斯の如く熱河と滿洲とは分つべからざる關係に置かれて居るので、我關東軍が昭和六年の滿洲事變に際してゼネーブに於ける聯盟會議の噉々たる反對論に耳も貸さず、一路其軍を進めて竟に滿洲國に合併したのは此の故ではなかつたらうか。

午後六時尹怡恩氏の招宴に其宅に赴く。此日は舊端午節に當るので其饗筵は頗ぶる鄭重であつた。尹は承德の紳董で現に熱河新報を主宰し兼て盛京時報支局を担当する人である。歸宿後更に前庭に冷酒を酌み、傲霜庵兄と古今を語り新月の警鍾峯に懸るを賞した。

同三日（金） 晴

前七時四十份柴崎、尹の兩氏に送られ承德驛を立つ。驛は喇嘛寺風の建築を模したもので此地

としては相應しき意匠なりと思ふた。此の汽車は數日前の豪雨で處々に損所あり且つ新築の軌道でゆるみを生じて居るので運行頗ぶる漫々的である。灤平驛は承德から一八軒で康熙帝が最初に行宮を建てられた所で灤河に沿ひ運輸の便がある。今は縣公署を置き、人口七千を有する小市街で且つ阿片の産地で、其の花盛の頃は滿目花園の如しと云ふ。双頭山は灤平の北八支里にあり直立百餘丈の大小二つの巨巖が聳へ居る處から、此沿線での奇觀として有名である。それに其一つの方が我若槻男の顔に似て居ると云ふので、今では若槻岩と呼ばれて尙更有名になつた。眞に失笑の至りである。

灤平より以南古北口に至る八十八軒の間は始終灤河の上流流域を出入し極めて寒僻の地であるが處々阿片の栽培せらるゝを觀る。尙ほ停車場は凡て假建築であつて其トンネルの如きは山上の最も薄い部分を鑿開して通車せしめてあるので、上りは急に下りになると列車を幾廻か前進後退して漸く下降する状態は、日露戰役時代安東奉天間の輕便鐵道が鷄冠山、福金嶺を上下したと同

じて坐に當年を想出して追懐に堪へなかつた。それに安奉線のは自體が輕便であるので進退するのに容易であつたが、是れは極めて重量の普通列車であるから其操車には多くの時間を要した譯である。聞く所に依ると此の鐵道工事は或る必要から工夫五萬を使役し北京迄二百五十軒を拙速を條件に僅々三ヶ月の日子で竣功したと云ふから、手數の掛かるトンネル等の工事は後廻としたのである。何れ後日本工事に掛るのであらう。斯くて八時間を費して漸く古北口に着いた。此所は國境の關係で彼是面倒な手續があり、驛辨で空腹を充したのは午後三時過ぎて無論此列車には食堂の設けはなかつた。

古北口は古來山海關、喜峰口、居庸關、獨石口と共に長城の鎖鑰で形勢雄大、市街は潮河を挾んで人口五千餘を有してゐる。それより列車は石匣鎮、密雲、懷柔、順義、通州等略ぼ白河流域に沿ふて駛り午後九時前門驛に着き盛京報の有留重利君に迎へられて北京飯店に入る。

同 四日(土) 曇(時々小雨)

滿鐵事務所秘書及び深澤暹君來訪。君は今鐘紡會社の北京公館の主事であるが公使館書記官時代には今の臨時政府の王克敏杯を痛め付けた一人である。正午滿鐵の牛島吉郎君から午餐に前門の豐澤園に招かれ同行の菊池貞二、有留重利二君と朝日新聞の本郷賀一君が同席であつた。歸途牛島君の案内で平和門を出て元の順天時報社の迹を尋ね當時創業の事ども思ひ出し懷舊に堪へなかつた。

顧みるに順天時報は明治三十三年義和團事變の翌年に創刊し昭和五年に支那の中央政權が南方に移動したのを理由に廢刊したものであつたが、此の擧は餘りにも表面の事實に拘はれ過ぎた處置であつたやうに思ふ。後になつて吉田茂君の話に聞くと當時此廢刊に就いての相談中獨り幣原外相が『折角三十年の歴史を持つ新聞を僅か經費位の事で廢刊するのは惜しい』と言つたとのこと

であるが、果せる哉其翌年には滿洲事變が勃發し延いて北支に冀察政權、冀東政權等が擡頭して北京は再び政治舞臺に復活し以て今日の形勢に推移したのである。若しも彼の時我當局者が今暫く持重したなれば此際順天時報が如何に役立ちたであらうか。世間には金さへあれば新聞は何時でも出来るやうに思ふて居るが此消息は新聞人でなければ判らぬのである。

現下北支に發行して居る主なる新聞は新民報、益世報、晨報、全民報等で新民報は新民會の機關で社長武田南洋氏が主宰して居る。而して奉天盛京時報の北支進出には大に頭痛に悩む人もあると言ふ。此日京綏線南口驛に共匪襲撃せりとの報に接し、その爲めに私の張家口、大同行きの日程は阻止された。

同 五日（日） 曇後晴

陶尚銘氏來訪。氏は故陶大均の子で私とは父子二代の交游である。大均氏は清朝の外部尚書那

桐の秘書官頃からの知合で後趙爾巽が奉天總督時代に交渉局總辦として奉天に來任した。丁度私
が今の盛京時報を創業する際であつたので尠からず氏の協助を受けたものである。其縁で今でも
盛京社には浙江人が絶へず在社して居るのである。氏は其後安徽省の按察使に昇進して彼地で死
んだ。尚銘氏は日本游學を卒へて長い間奉天に就官して居たので時々面會する折もあつたが、張
學良が滿洲退去に際し彼に隨身して入關して以來一向其消息を絶つて居たが今日突然の來訪で其
無事であつたのを喜んだ譯である。氏は今天津地方で學務に従事する由。氏の家は浙江紹興府の
舊家で陶淵明嫡々の子孫である。

此日堀内參事官の招宴で大使館の午餐會に臨む。同席の林出賢次郎、深澤暹、本郷賀一、山口
啓三、石川順、牛島吉郎、有留重利、菊池貞二の諸君は主人堀内君を始め大概は同文書院出身の
人々で、それに又た此の大使館は私には殊に思出多いところであつた。席上色々の話も出て談論
風發、殊に堀内君の天津前任中になされた問題の阿片密造團二百餘人を一網に打盡した果敢の經

歴談は頗ぶる痛快であつた。同夜本郷君の招宴に臨む。
今日竹田宮殿下北京御着、御旅館扶桑館に入せられ私等も北京飯店から日華ホテルに移つた。

同 六日（月） 快晴

今朝堀内参事官東京に出發す。私は喜多少將を特務廳に訪ひ會談。次で滿鐵北支事務局に局長杉廣三郎氏を訪ふ。其の多忙な事は私と小時間の會談にも幾度か電話機にかゝると言ふ状態であつたがそれでも私の間に對して答へられた要旨は大略斯のやうであつた。現時滿鐵の關與する鐵道線路は奉京、京承、京綏、津浦、京漢、膠濟、正大、同蒲の諸線で勿論まだ敵軍の手中にあるものもあるが路線の延長は廣大多端で之に従事して居る滿鐵丈の人員は既に□□に上る現状である。而して此等の人々は敵の襲撃を防衛しつゝ破壊された軌道橋梁の修復、機關貨車の補充等實に不眠不休で戰鬥員に均しい仕事を擔當するので、既に多大な犠牲を出した譯であるが其結果

津浦線も遅くて七月一日迄には確實に全線開通の見込みも立つたが、唯困るは例の敵のゲリラ戰術で絶へず後方を攪亂するので時々鐵道の運行を妨害せらるる事はある。既に先夜（三）の如き近くの南口驛を襲はれて驛長以下三名の負傷者を出したが此のやうな事故は既往も已に然りて當分は免がれぬ事と思ふて居る。それに電話線を折斷せらるるには實に當惑で銅線の補給にはほとほと困却して居る云々。午後萬壽山離宮を觀る。

同 七日（火） 快晴

蘆溝橋の戰跡を訪ふ。顧みるに昨年七月七日一發の砲聲此の地に動いて戰雲竟に四百餘州を覆ふに至つた。蘆溝橋は永定河に架する橋で長サ二百七十米大理石を以て造られ金の大定廿九年の創建で洛陽の天湯橋、西安の瀾橋と天下三橋の名がある。橋畔に故陸軍上等兵本間四郎戰死の所とささやかな木標が建てられてあつた。橋上に立ては一文字山、長辛店の戰跡歴々指顧の間にあ



てに山壽萬

盧溝橋上に立つ



宛平縣城にて



乾隆帝德月碑



民難るけ受を恤救に班撫宣

り。宛平城は河に臨む小城で戦後敗残の状眼を掩ふものがある。

北京外城の彰儀門より蘆溝橋に至る十七軒の舊來の道路敷石は悉皆取除れて新道路改修中であるが、開けば此の方面に新市街を増設する計畫であると。私の一瞥した所では豐臺方面に向つて北京を擴大するではないかと思はれる。既に一部には路形を造り敷地を區劃して居る所もあつた。蓋し都市の膨脹は世界的の趨勢で獨り北京に限つたことではないがそれは平時のことで支那は目下戦亂中であるのに此の計畫を必要とする所以は事實其狹溢なるに迫られた結果だと思ふ。回顧するに支那政權が南京に移つて以來北京は蕭條を極めたもので、私が昭和五年の秋京津地方を漫遊した際が其の衰退の極度であつた。市中に自動車の隻影もなく實に閑古鳥の鳴きそうな光景で、随つて我が小學校の如きは其維持にさへ困つて居る情況であつた。言ふ迄もないが北京は消費の地で政權の存否に依つて盛衰するのは當然の歸結である。

今回の支那事變に幸に北京は戦禍を免かれたのみならず、臨時政府の建設、我が軍部及び各機

關の放資する消費は實に莫大なもので、獨り現住の北京商民を飽滿せしむるのみならず、附近地方の有財者若しくは商民が風を臨んで此の安全市場に集中するのは自然の趨勢で今日北京が従前に倍加する住民の増加を來たすに至つた譯は怪しむに足らぬ事である。私は義和團事件直後より五年間北京に滞在し其後も滿洲より始終出入して居たものだが曾て今日程の殷賑の光景を見たのは始めてである。それでは北京は全く民心が安定して不平分子は一切絶無かと言へば尙ほ一部には却つて困窮して居るもの、不平を抱いて居るものもある。況んやスパイが澤山潛入して種々の密計や惡宣傳を行つて居る今日に於てをやだ。併しなから紛々たる中にも大勢の流れは自から其方向があつて此の方向を自覺する明を持つて居るのが支那國民の個性である。是れは支那人が古より革命亂離を経て來た自然自得の結果で支那が案外早く大勢の定まるのは之が爲めである。故に支那人は大勢の見込が付き治安が維持せられて居れば外部よりの少々の煽動位で動搖するものではないから當局の人々は此の民心を散さぬ事が肝要である。支那は古より一國の首都を「首善之地」

と言ふ位で全國の治安は先づ北京より首じめねばならぬと思ふ。

此日寺西秀武君の恢弘塾を訪ふた。偶々君は滿洲へ旅行中であつたので講師山口益三氏に案内せられて塾内を一覽した。現時塾生日支人廿餘名で學寮は整頓し且つ清潔であり風規節制等は君の統率の下にあるので申分はない筈。其翌日に君が北京に歸られたので尙善く直話を聞いたが、其話には現在の塾生の外まだ此上三十名位は收容せらるるが丁度隣家に尙ほ一軒あるので此際借入れて置きたいと、目下交渉中である。而して塾生の脩學年限は二年で十分用に立つように仕度いと思ひ自分獨特の語學書編纂を始めて居るが、現在入塾して居る支那學生は大概北京大學の學生であるから自習室では日本學生と語學の交換に畢生の勉強を續けて居る云々。君の恢弘塾は其の町名の蓋甲廠より名を取つたものであり、其塾風は吉田松陰先生の松下村塾に私淑して之れに兵營と禪堂の生活とをつつき混ぜたような家塾で、且つ今の世の中に鐘をたゞいて探し歩いても容易に代りのない君の監督指導であるから將來海外に雄飛する青年の訓練所としては此上もない

理想的の設けだと思ふ。一ヶ月に三十圓もあれば凡てが足りるようだ。午後朝比奈宗源師來訪、師は私と前後して鎌倉を立たれたが既に京漢戦線及び大原、綏遠、大同等を順錫して入京せられたのである。今朝寺内軍司令官と面會の豫約であつたが其の通知が既に私の蘆溝橋に去つた後であつたので遂に失禮をした。後に寺内大將から面會の機會を失して遺憾であつたとの書翰に接したが却つて恐縮した。此夕べ大風塵。

同 八日(水) 晴

寺西君と話後牛島、菊池諸君と共に寺西君得意の骨董穴の探求に出向く。私は六朝末期出土の土偶外數點を購得し午餐を共にして別る。此日暑熱。通州街道に残敵襲來の報あり。

同 九日(木) 快晴

今朝滯京中多大の世話を受けた杉、牛島、本郷、深澤諸氏の宅を回禮す。寺西君とは遂に面會の機を得ざりき。歸途故宮を參觀し午後五時半牛島、深澤等諸君に送られて前門驛を立つ。午後八時天津に着き大田外世雄君に迎へられて大和ホテルに入る。今日北京、天津兩驛で見た女巡查の濃いカーキ色の服装に同色の帽子巻ゲートルに短劍を帯びた颯爽たる出で立は私の眼には實に創見である。聞けばスパイが婦人を利用するので其檢視の爲めに出來たものであると。

同 十日(金) 晴

天津は私が近く昭和五年に來た當時は支那政府の革命外交論の盛んな時代で、天津の各國租界でも英國あたりでは租界撤退を覺悟して居るし我政府でも其邊の用意として我が租界の公共財産の處分を準備して居る際であつた。一面には又た梁思洪等が内々安福派を見限り同志を糾合して復辟運動を計畫して居る際で、私は大倉組の故増永常雄君と梁の一味の某某等に會見した事があ

る。當時梁は浙江に歸省して居たのであつた。而して私が福州以來の舊交である清の大傅陳寶琛翁を尋ねたのも其時で當時翁が私に贈つた詩に

綠蓉丹橋分携處。平陸成江過卅秋。數遍舊人都鬼錄。一尊老禿話神州。

中島眞雄君丁酉戊戌間在閩往還至稔頃來訪予沽上追念疇昔感交深以小影爲贈并

系一絕 庚午仲秋八十三叟陳寶琛強庵識

其後翁は八十八歳で天津に於て竟に易簣せられたが私とは此會見が其最後であつた。翁は人も知る如く清朝三百年を通じての大家で而かも今の滿洲國の康德帝を七歳の時から教導せられた人であつたが、晩年滿洲新朝廷の人とも意見が合はず不遇で世を去られたのは悼むべきである。易簣の前年に友人實相寺貞彦君に托された書翰に見て其の然るを知つたのである。

斯の如き過去を持つ私が今度八年振りに來ての天津は實に天地懸隔の相違で租界を支那に返すどころの沙汰ではなく、却つて其狹溢なるに困つて近々土地買收の相談に日本に歸ると、民團長



者筆と生先琛寶陳故

中真名之人聞子別未詢心三載瞻望

顏色勉效為勞寶相寺元過此劫如

匠者延有新京之蓮存地重臨

獨照而及必有遠猷可辨則于身日即長存致負

夙約去秋勉走疲苦獲遂展親浴而月亮無祥贊反以拾疑

惜彼時無併遇吾

故人一餘哀曲也劉保讓某亦以予之章墨暫進稍忘前在東岳

教事深情款待述之至今感重相寺歸程孔道並相不及因取云

春以梅一尺寄呈以代映對

我有回教三山舊雨臨六准哀仍辭存

交際常同慨即臨茲神地祇頌

若者甚恨

賢不備

寶琛再拜 十一元

の臼井忠三君が私に話す程の發展には驚いたのである。

此朝臼井氏を其自宅に訪い久し振りに其夫人にも面會した。正午同氏の招宴で足立、森川、李、山内、太田、有留、菊池等の諸君と敷島の午餐會に出席した。同家の主婦は臺灣以來の舊知で今年六十九歳と云ふが頗る健在で且つ益々家業繁榮なるは目出度き限であつた。散會後太田君の東道で郊外の南海大學の戦跡を觀た。本大學は米國富豪の寄附に成る綜合大學で支那では有名の學園で廣大な地域を占むるので今次の戦役に敵兵が此に據つて我軍を悩したと云ふ。目下は我波多野部隊が駐屯して居る。私等は守衛の導引に依り備さに場内敗殘の跡を見たが我爆撃力の偉大なるには驚歎したのである。それより競馬場各國租界等を一巡し最後に白河河岸の我物資堆積の狀及び支那民船の列を作つて待機して居る有様を觀て宿に歸る。

同 十一日 (土) 曇

前九時天津驛を立つ。驛頭臼井、太田、及び北京より送つて來られた有留君に別れて奉天に向ふ。途上唐山、山海關を過ぎ滿洲に入つてから綏中、興城、連山、高橋、錦州等の地方發展で従前に較べて面目を一新したのは驚された。就中興城は近頃まで寧遠城と呼ばれ明末の英傑袁崇煥、祖大壽が清の太宗奴爾哈赤の大軍を沮止した處で歴史的に知名ではあつたが、滿洲事變以來錦州の繁榮につれて同所の温泉は鐵路總局の直營で其附近の古蹟と共に遼西一の游園となり隨つて交通其他の設備が美化したと云ふことである。溝幫子附近で夜に入り十一時奉天に着く。

同 十二日 (日) 曇

同 十三日 (月) 晴

大橋熊次郎君來訪君は袖中から日露役當時の舊文書を出して私に示された、其文に

中 島 眞 雄
孫 葆 璠

右ハ滿洲軍總司令部福島少將ニ面會ノ爲メ大石橋ニ至ルヲ許可ス

明治三十七年八月廿四日

營口軍政署 印

想起す日露の役私が孫葆璫氏を伴ふて北京より營口に出で同所で大橋君を案内役に頼みて雨季の泥路を夜半過ぎに大石橋の我滿洲軍司令部を訪問したことを。顧ふに此の事は元來が兒玉將軍に關係を持つて居るから私は對支回顧録の兒玉大將傳に其顛末を記して置いたのであるが、尙ほ繰返して云ふなれば孫葆璫氏は福州の人で進士出身の候補知府であつた。私が東亞同文會の福州支部長として居る頃、孫氏は同地で親日派の巨頭で隨つて同文會には大に力を貸した一人であつた。明治三十三年北清に義和團が蜂起し勢い南清にも其餘焰を及ぼして來たのであつた。適々福州は此年稀有の洪水で多數の被難民を生じ、棄てて置けば動亂の媒となる恐れがあるので、土地の紳董が臺灣及び南洋にある福州出身の華僑に向ひ義捐金募集に出派することとなつて、臺灣へ

は孫葆璫、王孝繩の二人が私の介添で兒玉總督に前件の許可を面請した處、總督は兩人に向ひて言はるるに「知らるる如く目下我公使は北京に於て貴國の官兵に攻圍せられつゝある。余は同僚の誼として貴意に應ずる能はざるを遺憾とする、されども幸に二位の我境に臨まるる交誼に對して義助金として余は別に考慮せん」と。即時に三井、臺銀、商船等の名義を以て金四萬圓を提供し且つ其滞在中は南菜園の別業で詩會を開く等優待禮を盡したものである。此の總督の盛意には深く兩人を感動せしめた。後數年孫氏が奉天將軍増祺に招かれて北京の留守役をして居る頃私も又た北京に順天時報を發行して居たので互に交友を續ける間柄であつた。既にして日露戰役の進むに従ひ將軍増祺は俄かに奉天交渉局總辦李駢珊を北京に轉任せしめ孫葆璫を其後任に据へて兩人其位地を取換へることとなつた。是に於て孫氏は一日私を訪ねて來て自分は今回奉天に轉任することとなつて急に征途に上る筈であるが、就ては其途上一應兒玉將軍に會見して其内意を聞き昔日の恩意に酬ゆる所存であるが、貴君は余の微意を諒として滿洲へ同行しては呉れまいかと云

石齋先生字克頌佳可道此
後行誌
不遜翁主人雅鑒 不宣也

思ひ出の戦線通過許可證



河堡堡谷農場觀察

ふのであつた。私は即座快諾の旨を答へ且つ内田公使に其事情を報じて孫氏を紹介し翌日公使館に會して公使と旅行上の手段等に就き審議した。それは當時露國の密偵が京津及び塘沽、山海關の間に注視の眼を張つて居る際に、苟も奉天官場の重任を帯びて居る交渉局長が滿洲の日本戦線内に潜行したとあつては其關係は容易でないので此に細心の注意を要した譯である。北京出立の日は孫氏と私とは同じ列車ではあつたが氏は商人風に身を紛し態と小妻を携へて下等車に乗込み、尙ほ塘沽までは我社の一宮房治郎氏をして蔭ながら保護せしめたのである。途中綏中縣にて小妻を降車せしめ此處からは始めて私の車室に来て營口に入つた。同所で軍政官與倉中佐に事情を告げて總司令部へ打電して貰つたら、司令部は今夜北上大石橋に宿泊するから同所へ來いと返電して來た。そこで前記する如く大橋君を煩はして午後營口を立ち大石橋に着いたのは既に深夜であるので、翌早福島少將と會見して今後の打合を了し、次いで兒玉將軍に面會したのであつた。時に將軍は既に結束して大山總司令官と轡を控へて待つて居られたが、馬上ながら親しく孫氏と握

手を交はした。其時の將軍の如何にも満足氣の顔色は今も猶ほ眼前に彷彿するようである。即ち此の營口軍政署の通行證は其時に用ひたものである。爾後三十餘年今や其人己に亡し書に對して獨り忸怩たる久矣。

同十四日(火) 雨 奉天滞在

同十五日(水) 晴

庵谷忱君東京より歸り來訪、君は今治外法權撤回後の大和區長に特選されて居る。大和區とは元の滿鐵附屬地及び新たに擴大した日本人居住地の全體を云ふので、居然たる新興大市街の市長で、是れに石田武亥君の奉天市商議會々長を加へて現時奉天の二明星である。

同十六日(木) 曇

敵、黄河を決潰した報に接す。此晚金六亭の私の爲めに催された送別會に臨む、會する人々は
 庵谷 忱 手塚安彦 齋藤邦造 西田謹一 鶴岡永太郎 内山石松 武内忠次郎 三田村源
 次 松井倉吉 向野 晋 坂本常吉 奥田佐平 大橋熊次郎 南 洞孝 染谷保藏 菊池貞
 二 小平總次 東 光明

其他盛京社の同人等であつたが、石田武亥君外尙ほ二三の旅行中會見を得ざる人もあつたが、私は只々其交情の溫きに對し銘記して忘れざるものである。

同十七日(金) 晴

後二時奉天驛頭に西田、庵谷、鶴岡、小平及び盛京社の諸君に分手し、今回は復た染谷君の東道で北行の途に上る。後六時新京驛に着き大同新報の諸君に迎られて大和ホテルに入る。今日沿線を一瞥した所でも處々に水田が多くなり工場が新設せられたのは喜びに堪へないが、殊に四平

街が一方平齊線即ち齊々哈爾に通ずる線と、平梅線海輯線を通じて朝鮮の平壤に至る鐵道(鴨綠江鐵橋工
事未)が出来、將來四平街の發展は想像以上であらう。又た公主嶺は兵營の設備が以前とは變つて居るやうに見えた。着後尙ほ日のあるので大石君の案内で新營の市街を通觀して天平に晩食を取る。天平は此地では評判の食道樂である。

同十八日(土) 曇

朝中根齋君來訪。今日も染谷大石二君と南嶺の戰跡から宮廷、官衙、會社、公園、市街、道路等の建設を觀る。何様野中の中央に何等の懸け構へもなく奔放的に計畫した都市であるので、其規模は大陸的に出来て居るのみならず、國務院其他官衙の建築意匠が、我が東京の諸官衙のやうにどれもこれも同じ様式で平凡極まるのに似ず立體的にも平面的にも各々其様相を變へて居るのは頗る人目を惹くものである。

此日滿洲拓殖公社に總裁坪上貞二君を訪ふた。君は熱心に移民問題を説いて其所信を傾け、尙ほ私に實地視察を慫慂せられた。左なくとも私の此次北滿旅行中の重要問題であるので、参考書等の寄贈を受け、且つ君の招宴は兼約あるに依りて之を辭謝し歸途中根君の會食宴に臨む。

同十九日(日) 曇

朝大石君と吉林に往く。昨年建設された故島川毅三郎君の追悼碑を吊はんが爲めである。碑は至極壯嚴に出来て居るが、惜しいことには建設の位地が所を得ていないやうな憾みがあつた。吉林も大に舊來の面目を改めて新市街の建設、街路の改修、殊に江岸の人家を取拂つたので元來が山水美に富む土地丈に更に一段の風光明眉を増した譯だ。聞けば吉林の逆産沒收が二百萬圓あつてそれを費用に使つたものと云ふ。此晚滿洲重工業の梅津君の招宴に復た天平に往つた。

同二十日（月）曇

新京日々の上田賢象君來訪。午後六時染谷君と新京を立つ。驛頭坪内貞二君等と分携。客門、双城堡を過ぎ豪雨一過、双城堡は沿線中農産物の市場を以て有名である。十時半哈爾濱に着き山本大北報社長一家に迎へられ大和ホテルに入る。

同廿一日（火）曇後雨

山本、染谷、二君と哈爾濱郊外王兆屯の滿拓移民訓練所を觀る。本所は滿洲移民の幹部及基礎移民を養成する爲めに昭和十年最初に出來た所で所長飯島連次郎氏より本所の起源、教科、成績等に就いての説明を聞き且つ實地の状況を參觀した。本所は既往に於て既に五百餘名の指導員を各處の入殖地に送つて其成績を收め、現時の定員は二百五十名で尙ほ本年中には青少年訓練生の



島川三郎君追憶碑



國都建設



ハビルン山氏邸玄關にて



松花江畔

内貳千名を本所に收容する筈であると云ふ。歸途松花江岸のヨット俱樂部で午餐を取る。同俱樂部も露人全盛の時代には日本人など寄せ付けもしなかつたが今日盛衰地を代へて氣の毒にも思はるゝのである。松江の景象汪洋、時に大雨俄に到り爽氣更に一段を加ふる心地した。午後六時染谷君新京に向つて去る。これより以後私は山本君の保護による譯である。今夕同君の宅で久し振りに麥飯に長州料理の馳走を受け山海の珍味に優る思ひがした。

同廿二日（水） 晴

此日滿洲國皇帝陛下が奉天に行幸あらせられた。それは奉天の陸軍將校學校卒業式に臨御の爲めと聞く。私は奉天でも新京でも今度の行幸御警衛の爲めの豫行演習を見て奇異の思いがした。午後古澤幸吉君來訪自著鴻雪盧詩艸を持贈せらる。君は新潟縣村上の人、曾て青年の頃三浦觀樹翁に従ふて京城に在り故に閔妃事件の懷舊談は世間創聞に屬するものがある。後に小村壽太郎侯

の露都駐在大使中従ふて該地に留學し歸來久しく北滿に官遊し、今現に露字新聞を主宰して哈府に健在する。其詩作の進境は實に三舍を避くるものである。

同廿三日（木） 曇

午前九時五十分哈爾濱飛行場發黑河に向ふ。私は是れが臍の緒を切つて八十年飛行機搭乗の初陣である。離陸の一瞬體を堅ふしたやうであつたがやがては飛仙に化して下界を見下す痛快事を感ずるに至つた。松花江を横きりて呼蘭の上空にかゝり左に呼蘭河を右に綏河、海倫一帶の沃野を四五〇米の高度で飛翔するので北滿の穀倉と呼はるゝ地方を一望の下に收めて下瞰するのは汽車の窓から小さく展望するよりも眼界が開けて地理を概観するには要領を得て居ると思ふた。北安鎮は齊々哈爾濱より來る鐵道と哈爾濱より黑河に行く鐵道と合する所で、飛行機は此で低下して郵便筒を投下するのである。孫吳から小興安山脈にかゝり且要塞地帯に入るので飛行機も幕を下

したが脚下は一面の白樺林。山上は平原で水流が曲線を引いて居る様は奇観である。それより瓊瑋を右に見て黒河に着陸したのは午前十一時五十分であつた。此の空路距離は五百一〇軒である。飛行機では見られぬが通北、北安鎮邊りの高原地帯は夏季、山菖蒲、姫百合、鈴蘭、等が艶麗と雄大と兼有して其風景はまさに滿洲第一なりと旅行案内記には推賞して居る。北安鎮は鐵道開通後に大きくなつた新興都市で現時人口一萬五千を有し龍鎮縣公署の所在地となつて居る。而して辰清と小興安嶺間の森林地帯は面積一十萬町歩と云はれ白樺、落葉樹、の森林で大興安嶺と併稱せらるゝものである。

瓊瑋は一千八百五十八年今より約百年前露國極東總督ムラヴィエフと黒龍江將軍奕山との間に調印せられた瓊瑋條約を以て有名となり、爾來北邊要樞の地として殷盛であつたが義和團事變に際し露兵に蹂躪されてから遂に回復するに至らず、今では人口六千餘に過ぎざる國境の僻邑となつたのである。併し濱黒鐵道の開通に依り且つ宋家屯砂金鑛の有望視せらるゝので近頃其將來の

期待を持つやうになつた。又た此の瓊瑋が吾人に印證を與へて居るのは、曾て米國が錦瓊鐵道布設問題を提起して國際上に一石を投じた故であつた。

蓋し此の錦瓊鐵道問題はポーツマス締約直後米國鐵道王ハリマンが來朝して桂首相と南滿洲鐵道の豫備覺書を交換したのに端をなして居る。該覺書は小村外相の反對に依つて取消されたがハリマンは更に其計畫を大にし露國の西伯利亞、東清兩鐵道をも包含する歐亞の交通路を國際シンジケートの下に統一せんとする運動中、明治四十二年九月彼れは突然死去したが此の問題は米國國務卿ノックスに依りて更に變形して前記の錦瓊鐵道問題となつて再現するに至つたのである。即ち國務卿ノックスは在奉天米國總領事ストレートに訓令し百方運動の末四十二年十二月奉天將軍錫良との間に竟に錦瓊線に關する豫備協約を訂結し清國皇帝の批准を経る迄に著々其議を進めたのである。何様本鐵道は錦州から小庫倫、鄭家屯、洮南、齊々哈爾、瓊瑋を維ぐもので其延長九百六十三哩。總經費六千五百萬兩。更に連山灣に工費六百萬兩を投じて築港する計畫であつた。



北黒線の白樺林



黒河



大黒河よりブリラエを望む



北安



黒龍江風景(伊集せる)

是に於て我政府は四十三年一月露國政府と交渉の上米國の提議に反對した。又た露國は同時清國政府へも嚴重に抗議したので此問題は遂に米國の失敗に歸したが、當時在滿の我等には一時其成行を杞憂せしめたものであつた。黒河は濱黒線の終點で黒龍江を隔て、蘇聯のブラゴエチエンスクと相對し呼べば應へんとするほど近接した地であるので、經濟上の消長は常に對蘇關係に依るもの多く、歐洲大戰時代の如き其貿易年額四千萬元に上り當時人口四萬以上に上る盛況であつたが、其後蘇聯内部の情勢等にて漸次衰退の一途をたどり、滿洲事變に際して遂に不振の極度に陥つたが、其後滿洲國建設されて治安を恢復し次いで省政府の開設、濱黒線の開通、國防機關の設置等よりして漸次活況を復しつゝあり、現時は人口貳萬に上り内に邦人一千四五百露人亦た三百を數ふるに至つたと云ふ。

市街は黒龍江に沿ふて延び家屋は露國式で一吋滿洲の田舎町では異風景である。昨年九月蘇聯領事が當地を引揚げて以來國境間の往來は全く禁斷せられたが、尙ほブ府に残つて居る滿洲人の

數は決して少くない筈であると云ふ。

私は見ぬ前の黒龍江は其の名からして陰惨な感じを以て居たが、實物の黒龍江に接して其反對の明朗さに驚いたのである。松花江は其名は優雅であるが獨流滔々と如何にも無趣味に出來て居るのに黒龍江は水も清澄とは往かぬが稍々澄んで居て土地では皆飲料水に使つて居るやうである。

黒河の河岸には客船材木船或は筏が澤山碇泊して居るのに、對岸のフ府は繫船場が隠れて居ると見へて沿岸には一隻の船もなく、眼鏡で見ると軍馬戰車が江岸を往來し樹木を隔て、長く江に沿ふて兵營其他宏壯の建物が連續して居ると丘腹にトーチカらしいものが看取される。私は此夕旅館の樓上で晚餐を取つて居ると對岸の軍樂が遙かに水を渡つて聞ゆるのを肴に一杯を傾けた。

尙ほ此黒河全省は後に大小興安嶺山脈に圍繞され前に黒龍江を隔て、全面的に蘇領に接する滿洲北邊の國境である。而して本省の總面積は約拾壹萬平方浬、人口七萬四千人を有し其内には原始的のオロチヨン、タポールの兩民族も居住して居る。斯ふ云ふ僻遠の地で人烟稀少であるから

可耕地六百萬町歩の内既耕地は昨年の調べで漸く三萬〇百三十八町歩しか耕耘してないので、此に我が大量移民が豫定せられる所以である。勿論本省は山岳地帯が其大部分であるので、木材が産業の王座を占め林野面積約五百五拾萬町歩、其の材積が三十億石と云はれて居り、次ぎが砂金鑛で昨十二年度の黒河で買入れた高は約百四十二萬瓦であつたと云ふ。

同廿四日(金) 晴

特務機關の小松原少佐、豊田領事を訪ひ、零時半黒河を立つ。今日は來路に比して飛行機の動搖はあつたが午後二時過ぎ哈市に着いた。

此日齊々哈爾から孫傳魁君が態々會ひに出て來て呉れたことを感謝する。君は山東の人で多年盛京時報社に在社して私に隨身して居たものであつたが、今は同省の高等官となり勸業方面を担当する職仕に就くとのことを開き私は其榮達を喜ぶのである。晩に大北社同人と孫君を交へて復

た江岸のヨット倶楽部で會食があり、其席で大北新報の蘇聯方面を担当して居る露人記者に會ふたが何んだか一癖あるやうな人物であつた。

同廿五日(土) 晴

大北社の岩野定市郎君來談。君は近年迄で齊々哈爾で參事官をして居たので滿洲地方行政の實歴談を聴き大に益を受けた。夜來雷雨あり。

同廿六日(日) 晴

今日は愈々北滿で初の舟旅に上る日が來た。もつとも私は明治四十一年頃、故岡部二郎、山本瀧四郎の三人で吉林行の歸途に松花江を下り、陶頼昭まで二日の舟旅をした事があるから、萬更無經驗でもないが、前回は半分游山氣分であつたとは違ひ、今回は私としては多少の意義を

持つ舟行なのである。

前十時傳家甸埠頭に送行の諸君に敘別して汽船慶瀾丸に上船した此慶瀾丸は姉妹船の哈爾濱丸と共に此の航路では唯一隻しかない一等室を持つ千七百噸の客船であつた。其の設備も會社が御自慢程でもないが、比較的船室も清潔で美人の女給も二人ほど乗つて居た。水路は我海軍で精密に測量した上に、二重三重に標識が立てゝあるので水先案内を要せずとも航行に支障なきように出來て居た。私は□圖である其の水路測量圖を借覽したので大に參考を得たが、それによると碇泊所を除いては大概吃水□米と何分で□米以上は稀で、處によると□米かつつて特に□□□□□□□□□□淺瀬部と稱し夜間は頗る難航である。途中新甸、木蘭、通江に寄港した。

木蘭は縣署の所在地で人口七八萬を有し、邦人の居住者も百人以上に上ると云ふ。此の日木蘭より漸く夜に入つたが、我が舷側を通過する溯江船舶に出遇ふのは随分頻繁で其燈火には往々人家ならんと誤認した事もある。十二時後冷氣を感じて寢に就く。

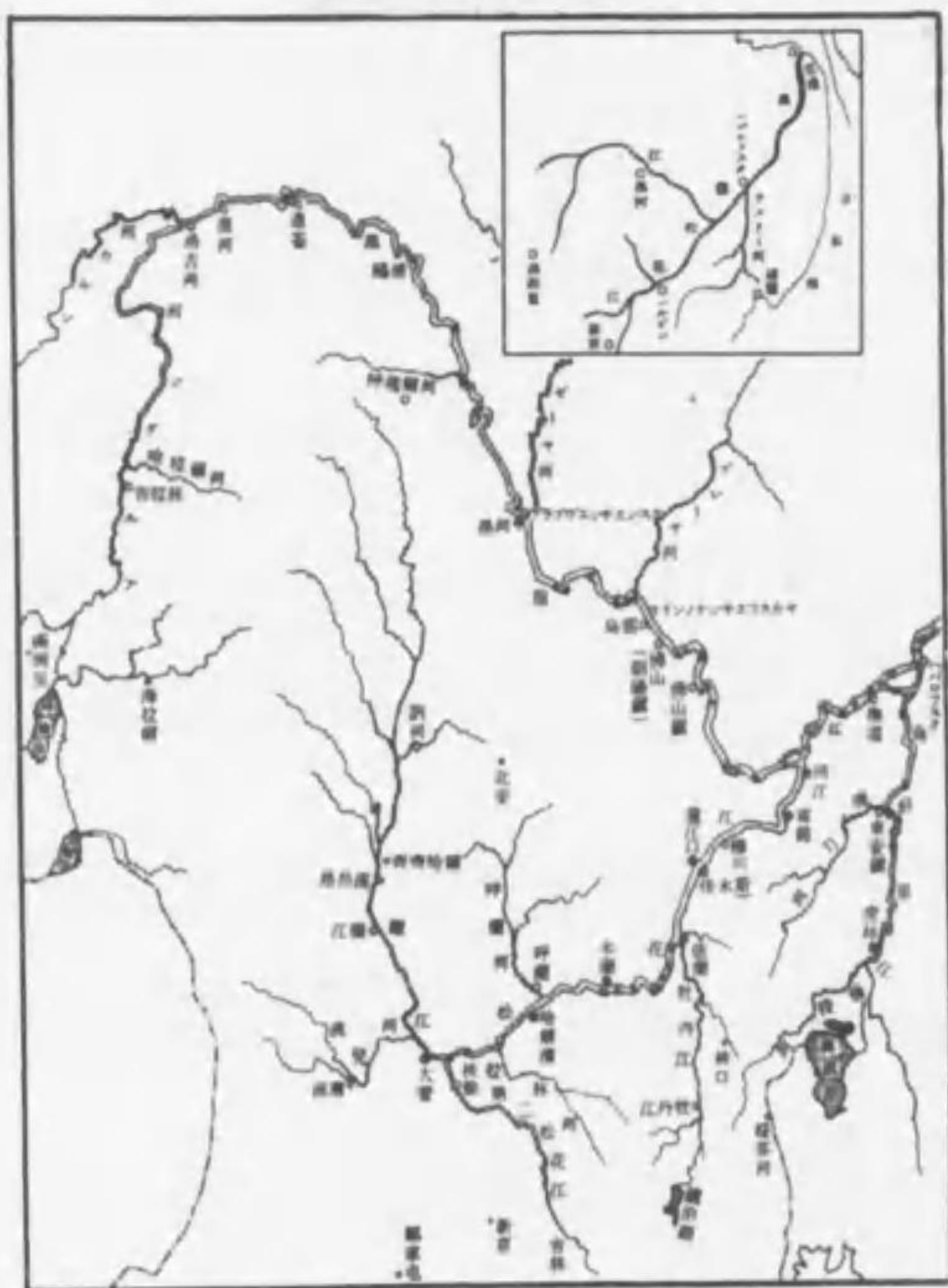
同廿七日(月)曇

早起霧多くして停船。八時三姓に入る。三姓は依蘭縣署の所在地で牡丹江の松花江に合流する所である。哈市の下流三四一軒、人口三萬餘を有し農産物、木材、毛皮等の集散市場で、又た焼酎、油房、製粉等の工場もあり、公私主要機關を具備し松花江筋では最古の地で、宋の徽欽二帝が拘禁せられた金の五國城は此の三姓であると云ふ。友人古澤幸吉君の三姓懷古の詩に

三鎮堅持徒討論。汴京不守奈中原。趙家八百年前恨。五國城邊叫蜀魂。

八時半三姓を抜錨し宏克力、蓮竹、湯原、敖其、連江に寄港し午後五時過ぎ佳木斯に着く。埠頭に迎へられた三江報社々長飯田台輔君の好意で公署用の自動車を得、豪雨泥海を衝きて一里餘の南崗大街の伊勢屋旅館に入る。尙ほ今日船中で聞見した事共を記して見ると。松花江に合流する牡丹江は今日では舟運はないが、江水が清澄な爲めに松花江の濁流も三姓邊りは幾分か其の濁

北滿河川の略圖



濁を薄めて居る。又た土地の婦人が色白であるので此の地方では三姓美人の評判が高いと云ふ。三江省に入つてから匪賊に對する警戒が殊に目に着き、三姓には我が碇泊司令部も置かれて、兵の江上往來が頻繁であつた。殊に匪賊防禦上、部落集團が實行せられて、孤立散在して居る民家を破壊した跡が各處に見られた。而して松花江沿岸には尙ほ將來開拓に適すると思ふ土地を散見し、敖其部落の江上では滿洲の江

防艦が四隻碇泊して居たが、私と同じ船客であつた我海軍准士官四名は此でそれに移乗した。尙ほ江航中□□海軍砲艦が海軍旗を掲げて江上を遊戈して居るのを見た事等である。

私どもは此佳木斯までの四百五十一軒で此の松花江の舟旅を終り、日程に依つて茲より佳圖線の視察に就いたので、僅か二日程の経験ではあるが、北滿を視察するには是非陸路と併せて水路を取る事の須要であることを痛感した。私は他日現在定期航路となつて居る松花江、黒龍江、烏蘇里江、嫩江、全航路六・六四五軒の全水路でなくも、其の須要の部分丈でも周航して見たいと考へたのみならず人にもそれを御勧めしたいと思ふのである。私は廿年餘も滿洲に居ながら此の北滿の水路に留意しなかつたのは近年迄此の地方が露國の勢力範圍に屬して居た關係もあるが、等閑に附して居た點は實に汗顔に堪へざる次第である。而して現時此の航路の經營は滿鐵會社が滿洲國政府の委任を受け、従前の經營者即ち滿人船主六十家をシンジケート航業聯合局の下に統制改善し、船舶大小三百數十隻を以て哈爾濱を其發着點として營業に當つて居る譯である。



計設街市新の斯木佳



る下を江花松



望遠の上船

頭埠斯木佳



頭埠姓三



街崗南斯木佳

惹起するのは元來が國境の不自然に職由するものである。一千八百五十六年露清瓊瑯條約の第一條に

黑龍江ノ左岸ニシテ「アルグーン川」ヨリ黑龍江ノ河口ニ至ル迄ハ露西亞帝國ニ屬シ其右岸江ニ沿ヒテ烏蘇里河ニ至ル迄ハ大清帝國ニ所屬スルモノトス。烏蘇利河ト海洋トノ間ニ介在スル地域ハ前記二國ノ國境ノ確定ヲ見ルマデ從來通り兩國ノ共有スル所トス。

とある如く沿海州は當時露清兩國の雜居地であつた。故に自然の地境を以て云ふなれば黑龍江を境界に其河口ニコライスクに至るの線に沿ふのが至當である。今後の蘇滿間問題は此の解決に向つて前進せねばならぬのである。又た滿洲事變の當初、匪賊總數は三十六萬と稱せられて居たが、爾來必死の討伐で今では地方全く肅正に歸し、其殘賊は悉く此の蘇滿國境山岳、沼澤の兩地帯に逃げ込み、而かも蘇聯庇護の下に其の生息を續けて居る情況にあり、且つ其匪數も確實には分らぬも概數一萬四五千に上らざるべしと云ふことであつて而して掃匪工作の一法として部落集

團が斷行せられ、爲めに一時怨嗟の聲が嗷々と民間に起つたと云ふが、現實の問題として民家が離れ離れに散在して居ては、之れを保護するに困難なばかりでなく、民匪を劃然と分離して匪賊を孤立に置く手段としては適宜の策であらうと思ふ。私の各地で親見した所では、最寄りの部落に合併したのが多いようだが、新に作つた部落もあつた。何れも周圍に土壁を築き、四方の角に望樓を設け、此の望樓で防禦するやうな構造である。而して官よりは此の部落民の連帶責任で自衛團の壯丁に武器彈藥を給し、又た民家戸別に對しては引越料、及び耕地を代償する方法を取つて居る。如上のやうな情況で匪賊の裁定は多く年を費さざるものと即斷出来るのである。

而して三江省全體の經濟上の内容如何と検討して觀ると、同省は實に將來を持つ處女的有望地なることを保證して餘りあるものがある。初め此の地方に漢人の移住を見たのは、近く光緒の末年に山東直隸の饑民が續々と境を越へて北滿に流れ込んだ時より始まるので、此等の移民は本土が器粟栽培の適地であるのを見て、擧つて斯の業に従事する内、光緒廿五年東清鐵道會社の成立

するや、露國は同會社内に河川汽船部を附屬して、前記罌粟栽培の爲め移動する労働者の輸送に着眼し、併せて其製産品貿易利用策を採るに至つたが、此の計畫は果して其圖に當りて、爾來河川航運業は逐年發展して、他の一般農業移住民の増加を促がす結果を見るに至つたのである。斯の如く此地方に移住民の増加するにつれ、阿片生産も亦た隨つて増加し、それが直に國境に接する露國との密貿易に依る關係上、此地方は經濟的にも政治的にも治外法權のやうなもので、且つ其の間に各其繩張を持つ大小の匪賊が割據して居たので宛然煙匪王國の封建の如き形勢をなして居た。

滿洲建國、地方漸く肅正に就いたので康徳五年に及びて政府は斷然と罌粟の栽培を嚴禁するに至つたのである。

統計で觀ると本省の面積は約十萬八千方秆、人口百十八萬餘で總面積の約八割は廣大な可耕地と推定されてある。此内から現在の既耕地面積約百拾一萬町歩を差引くも尙ほ六百八十四萬町歩の未耕地が放置されて居る譯である。それに當地方の農家一戸當りの耕作面積は奉天地方のに比べて約二倍であり、其上に收穫量も地味が肥沃である故に奉天地方よりは增收なりと云ふ。如上の事實は我が二十ヶ年五百萬人の入殖移民計畫中、本省に割當てられて居る移民及び耕地の百五拾萬人三百萬町歩の供給に應じても猶ほ餘裕綽々たるものがある。而して本省の別に有する山林嶺山等は此に省略する。

同廿九日（水） 雨

午前九時驛頭に飯田君と分手、佳木斯を立ち彌榮、千振の移民地に向ふ。彌榮は佳木斯驛より五十四秆、昭和八年四月我東北地方十一縣から約五百名を入殖した最初の移民地である。面積四萬五千町歩。内に森林、草生地あり、草生地を二分して各其半部が耕地及び放牧になる譯で、草生地の内には細流があるので水田開拓には絶好の條件を具へ、又た山林は薪炭及び建築材料があ

る。昨年の調べに依ると耕地開作は約一千七百町歩、水田貳百廿町歩、其他菜園等の成績を擧げて居り、現在の團員は三百餘名で其家族七百名を合計すると一千餘名の部落を現出した譯である。此内に現地で生れた赤坊の二百四十餘名も含まれて居るから、其後今年迄の一ヶ年の出生者を加ふれば相當増數して居ると思はるゝ。何様どの移民地も繁殖力旺盛な若者達の集團であるので、年と共に財産、人口の増大するは眞に喜ぶべき現象である。而して本部は概畧其原籍に依つて十五區に區劃され、本部の永豊區を中心に一番遠い部落は三里以上もあるが大體に鐵道線路に沿ふ高地で本部は彌榮驛構内にある。

彌榮驛から八虎力驛を過ぎて其次驛が第二次移民地の千振驛である。其距離は邦里七里であるが兩移民地の最端は相接して居るのである。千振移民地の本部は驛より邦里一里餘の湖南營にあり、私共は千振驛下車に際して豪雨に襲はれ悪路を衝いて正午過ぎ本部を訪ひ、此から當移民地の接待所千振莊に案内されて一泊した。丁度長野縣篠ノ井町から滿洲移民狀況視察の爲めに出張

して居るらゝ太田正充氏と同宿したのである。氏は同縣更級郡拓殖學校教諭で拓殖科を受持つて居らるゝ人であるから其調査は至極眞面目であつた。

千振移民地は彌榮移民地の入殖よりは數ヶ月後の入殖で人員も略同數であつたが、入殖後尙ほ匪賊の襲撃三十數回に及び彌榮千振兩移民地は何れも十五名内外の戦死者を出し交戦勇闘の餘遂に全地域を保全し、匪賊をして移民團恐るべしの歎を發せしめ爾後絶対に我移民地を侵さざるに至つたと云ふ。最初斯かる情況であつた爲め團員中前途を悲觀して脱退するもの全員の約四割に及んだが、今日の成功は其際に踏み止つて精進撓まざる現在團員の獲た結晶とも云ふべきものである。

千振植民地は彌榮村とは違ひ一望の平野で可耕面積一萬二三千町歩。其内に二千六百町歩の再懇地があり、水田見込地は約一千町歩である。而して本移民地の經營方針は全面積地の完成を速行せんとする積極的方法の下に諸般の事業が進められつゝあるやうで此の爲めには滿人の小作人

も入れ、又た其の勞力をも使用して居るのである。且つ本移民地内には從來から湖南營と云ふ小市街があり、入植前には僅か二百戸足らずの寒村に過ぎなかつたが、前件の方針の下に今では湖南營を中心に三里以内に日滿鮮人三萬人を包含する部落を形成するに至る。無論植民地市街ではあるが、各種の商店軒を列べて居る有様は、新移民地の創造時代としては他に見當たらぬ光景で千振郷廳其他の機關も皆此に置いてある。

昨昭和十二年三月彌榮村と共に村制を布き、團員は各一戸当たり二十町歩の割當を受けて純然たる個人經營に移り、而して彌榮村同様各部落を縣別に分け、本部を千振郷と稱し其下に十六個の部落を有するに至つたのである。昨年六月現在の人口は團員三百二十五名其の家族六百六十六名合計九百九十一名、此地で生れた小兒一七五名も含まれて居るが助役徳永寅太郎氏の談に、今年迄の小兒の生誕は既に四百餘名に達すると云ふのに考へると、現在の實數は一千三四百になつて居る譯である。私は郷廳の案内で部落及び農産加工場、農事試驗場、種畜場、小學校、病院等の

内特に部落の情況、農産加工場を撰んで參觀した。部落は各一棟を二戸の家族の住居となし、中央の入口が土間で、其行きあたりが臺所で暖房を兼ね、其左右に各二室宛の居間兼客間がある。而して屋外に厩兼農具格納戸が一棟。又た家に依りて煙草葉の乾燥室の附いて居る處もある。戸毎には農用馬車一臺馬二頭、或は二臺に馬四頭を有する家もあつた。屋外は相當の廣さを持ち鶏豚は毎戸に飼養し他の畜産は共同組合の下に經營する仕組で、彌榮村團隊に於ても畧同様であるやうに見受ける。但し彌榮村には薪炭販賣業、煉瓦製造等があるが是れは土地の情況に因るものであつて一概には行かぬのである。養蜂は兩所共に遣つて居る。千振郷にはホームスパンの製造をなし殊に此地の煙艸は哈爾濱の市場でも名を馳せて居ると云ふことである。

千振の農産加工場は元と湖南營の大地主が所有して居た油房を買受たもので其規模も大きく、此處で加工する品種は豆油、豆粕、麥粉、醬油、味噌、酒、燒酎、蜂蜜等であつて何れも多分は外部へ販出するのである。私は晩酌に此で釀造した酒を試みて見たが大分粕臭くはあつたが正直

に出来て居るのが結構と思ふた。代價は一升九十錢であつた。

畜産は彌榮よりは頭數も少し増加の方で主に馬匹、緬羊、豚の改良に鋭意して居た。昭和十二年八月現在で馬八二八、牛四〇〇、緬羊一七〇〇、豚一五〇〇等である。

以上は私の今回實地踏査した彌榮、千振、兩移民地の概況に過ぎぬのであるが、千振郷には一泊した爲め前日の半日と翌日の半日とを同郷に滞在したので、團員男女の人々と三度の食事を共にし其の嬉々として落付いた様子に接して、最早此の移民事業には浮動するやうの恐れは無くなつたと深く其將來に望を持つ確信が出来た譯で、私が會て抱いて居た滿洲移民不可能説は今更ながら其認識不足を耻づる次第である。私は食事中に色々と問を起したうちに、滿洲は冬季間が長い爲め農業上日本人として前途の成功如何あるべし、懸念するとの間に對して『我等も最初それを心配して居たものであつたが、今日に至つて無用の杞憂に過ぎなかつたことを體驗した。それは耕地の割當てが廣いので、今年の收穫物を仕末するにはどうしても翌年二月一杯に持越すことに



千振郷クラブホートムにて



同郷舎



千振移民村商店街



千振郷役場



千振郷にて移民より搾取を乞はる



千振郷女に關して

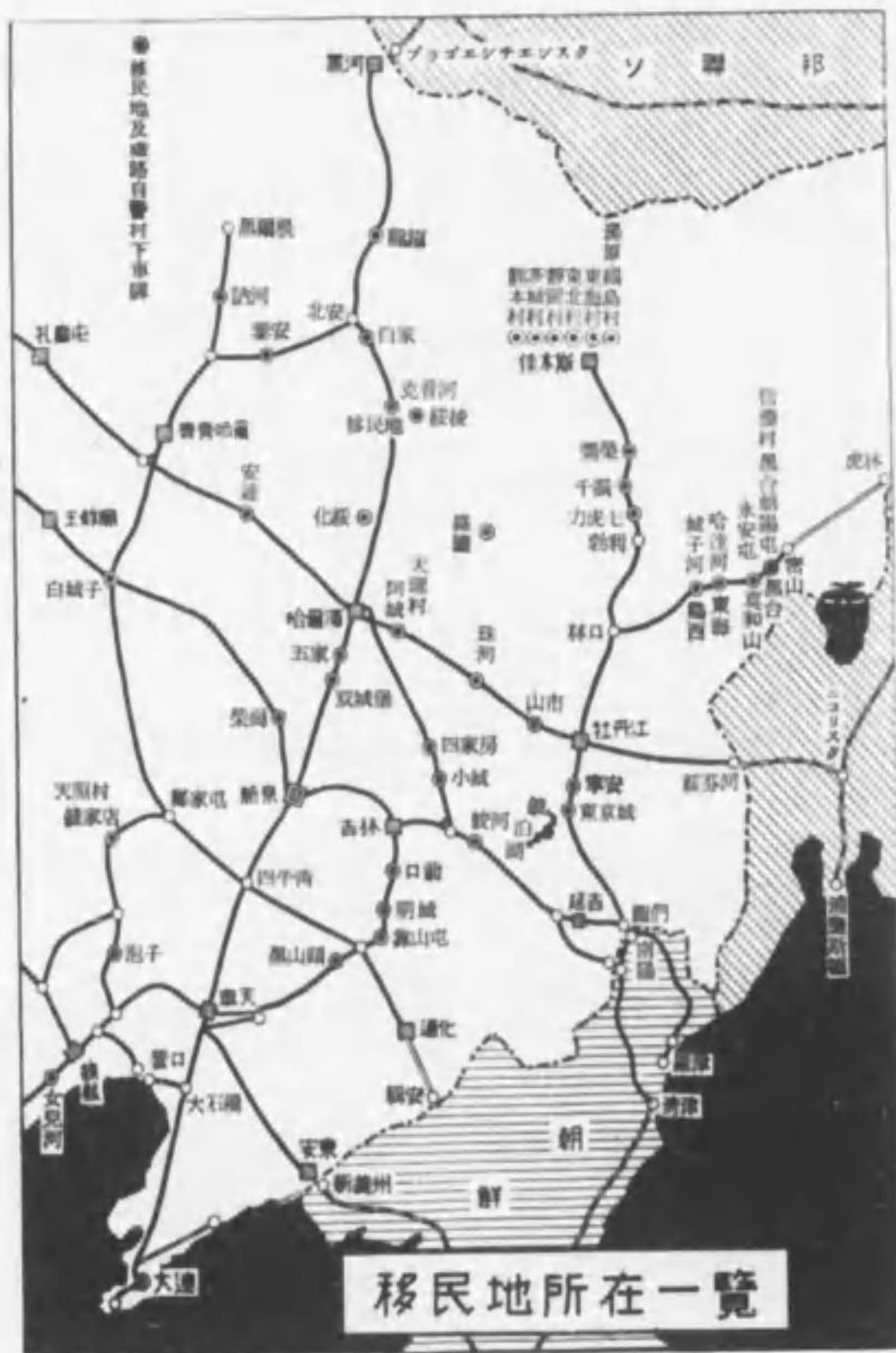


移民働く

なり、彼是して三月に入ると、其月の廿日頃に至れば本年の農作準備に掛るから真に休養期間は廿日間前後に過ぎぬのであるが、是れも實際は手を空けて遊んで居る譯ではない。且つ此二三年冬季になると森林伐採の方に護衛として備はるゝので、危険は伴ふが日給四圓を得るから、今の所冬季になると却つて臨時の収入を得る譯である。又た婦人の方は一定の内職はないやうだが綿羊の毛織物を造れば之れも自給自足上一廉の仕事で、丸々遊んで居る譯ではない』と云々

而して現在滿洲移民事業の大體の成績に就いて觀るに、滿拓公社統一の下に既に廿八ヶ所の移民地區を設定して大約人口一萬餘を收容し得た。猶ほ昭和十一年八月確定した廿ヶ年百萬戸、五百万人、入殖計畫の方針に基いて、昨年度より其實行に入つて居るので今後十九ヶ年間は人口自然増加を合すると約一千萬に近い同胞が滿洲に存在することとなるのである

昔年米國政府が我が移民の入國を拒絶した際、時の外相小村侯は議會の質問に對して、滿蒙地方には猶ほ我が國民數百萬を容るゝの餘地ありと答辯したことがある。當時世人は一の詭辯位に



思つて居たが、今にして始めて侯の遠謀遠見の、夙に此に在つたのを知り歎服に堪へざる次第である。尙ほ滿拓では今年更に青少年團三萬人を嫩江、孫吳、鐵驍、勃利、沙蘭鎮の五個所の訓練所に入所せしむると云ふ。今夜當千振に駐錫せらるゝ本願寺佐々木愨師來訪移民に就いての談話あり。

同三十日(木)曇

私か此處の視察者中で一番老人であつたと云ふので拙書を需めらるゝから「旅の耻はかきすて」と數紙に塗鴉して午前十一時千振驛を立つ。それより闔家、倭肯、杏樹等の驛を経て勃利驛に着く。勃利は佳木斯市より百三十五軒で勃利縣署の所在地、圖佳線中では屈指の市邑である。同驛より線路は徐々山地帯に入り山谷に間々水田を見るが、悉く朝鮮人の經營に係るものである。上の通天驛は佳木斯行列車と圖們行とが行合ふ所で、それより佛嶺、虎山、青山の間は全く丘陵起伏の草野で青山驛に至つて始めて小部落を見、古城鎮驛より漸く山岳地帯を出るのである。此處には滿洲林業會社の林業移民團があり、又た山林への輕便鐵道建造中であつた。林口驛は滿蘇國境の虎林に至る鐵道分岐點で虎林まで三三五軒、其中間の一六四軒に密山驛があり、虎林と共に縣署の所在地である。其沿線に城子河、哈達河、朝陽屯、信濃村、黑臺、永安屯等の我が集團

移民村があり、昭和十年以後の入植であるから歲月も未だ淺いが、昨十二年六月の調査に據るに家族合して三千餘人が肥沃の廣野に開拓の手を揮つて居ると云ふ。而して林口驛は今や新興の機運に充つる有様で、其詳細を語るは差控ゆるが其一例に菊屋ホテルと云ふのがある。以前なれば「アンペラ」ぶきの小屋でも濟んだであらうが、土地に不似合な玄關作りも皆其發展の餘澤であらう。寶林、仙洞、樺林等の各驛を過ぎ午後八時牡丹江驛に着き大北新報支社員に迎へられ花屋ホテルに入る。

今日の旅程中勃利驛より牡丹江市に至る百九十六軒の間は大約山間驛で、各驛に集積するものは丸太薪材の類。中に就いて樺林驛は牡丹江に臨みて木材の集散地ではありバルブ工場を有する等沿線では一寸目を惹くものがあつた。

七月一日(金)晴

大北新報員の案内で市中及び掖河を觀る。掖河は市内より一里餘牡丹江上の丘陵にある一驛である。舊露國時代には療養所及游船釣魚を楽しむ避暑地として其景勝を愛されたもので、丘上に立てば牡丹江市を一望に收め背後は丘陵連亘して眞に兵要の地である。今日も尙ほ白系露人の在住するもの數百人を下らずと云ふ。牡丹江市は舊市街と新市街とに區別し舊市街は露國東清鐵道の哈爾濱、浦潮間の線路驛に屬する市街で今は此鐵道を濱綏線と稱して居る。又た新市街は圖佳線開通後新に興つた市街で、牡丹江省が創設せられて漸く滿一ヶ年にしかならぬに、既に人口五萬を有し將來三十萬人を目標に現時大市街の建設工事を急いで居るか、何れ新舊市街は一つのものになるのである。蓋し本市は濱綏線との交叉點に當るのみならず、尙ほ管内に虎林鐵道を包容するのと、背後に牡丹江平野の物資を控へ、一面又た其水流に沿ふ森林地帯を有するので、地理上哈爾濱に亞ぐ北滿最大な都市たることを豫想されて居る。更に牡丹江省全體の姿を觀るに、東面一帯は烏蘇里江に臨みて蘇聯に境し面積五七、三八八平方料、人口約六十貳萬内に白系露人三

千五百人を含むのは國境に接して居る關係であらう。而して本省の産業は農業が其中樞で林業之に次ぐの實狀である。其可耕面積は約百三十三萬町歩、其内三十二萬八千町歩が既耕地であるから残りの約百萬町歩は尙ほ將來の開拓を待つ譯である。又た山林面積は約三百十萬町歩で其材積は十四億七千萬石と推定されて居る。其他鑛業は現在稜稜、密山、鷄西の炭鑛の外未だ未發見である。今夜豪雨到る。

同二日（土） 晴

午前十時過ぎ牡丹江驛を立つ。列車は海浪、溫春を過ぎて牡丹江を渡り寧安驛に着く。寧安は舊寧古塔で渤海國以來滿洲最古の地現時寧安縣署の所在地である。人口四萬有餘圖佳線開通以前に在つても穀物取引高は年百萬石に上ると云ふ。蘭崗、石頭の兩驛は共に牡丹江に臨むの地、私は先年亡友中西正樹が吉會鐵道の豫定線路を踏査しての歸途、局子街より寧古塔に向ふの途中、

牡丹江畔に於て匪賊の襲撃を受け九死に一生を得た當時を想起して其遭難の地は或は此邊りではなからんかと、願望感慨之を久しふするのであつた。石頭より山地に掛ると直ぐ東京城の平野に出づ。東京驛は其故都なるに因みて驛の建築を支那風の宮殿作りに意匠を働かしたのは嬉し。此の地は寧古塔を距る僅に三十九軒。西牡丹江上流地方の農産物集散市場で現時人口一萬餘を有すと云ふ。舊都の地は驛よりは四軒にあり、近年我國考古學の先輩等が二回に亘りて調査せられて其概要は同人著『北滿風土雜記』に出て居るから此には略するか、何様渤海國は我奈良朝、平安朝時代朝貢往來した古い關係を持つ國家であつたことは、此の調査團の手に發掘された、我「和銅開珍」の出土に見ても證明せらるゝ譯である。蓋し渤海國は高王大祚榮が國を建て、より十五代百七十餘年にして遼の太祖阿保機の爲めに亡されたが、其盛時に當つては東滿洲一帶今の蘇聯の沿海州から朝鮮の北部を掩有し「海東の盛國」なりと呼ばれて居たと、同記にもあるが如く故都上京龍泉府の遺蹟は、當時の文化を語るものである。

鏡泊湖學園で知名になつた同湖は此處より六十軒で、勿論鐵道線路とは離れて居るので見物は出来なかつたが、筆の序でに其開得たことを記して置く。周廻一一八軒千古の天然森林に圍繞せられた幽邃境であり、殊に吊水樓瀑布は牡丹江の水源を成すもので其流出する水口は高さ二十五米。水聲百雷の如く其傍に「中國第一瀑布」の石碑が立つてあると云ふ。

東京城より鹿道、春陽、三芬口、大荒溝、石峴を経て圖們に至る約百十軒邦里の四十五里間は山岳地帯で、沿線に老松嶺、老廟、駱駝山、天橋嶺等の森林を藏し又た此邊りが猛獸狩の好場所であると云ふことである。鹿道、春陽、三芬口よりは森林地帯に入る輕便鐵道の布設してあるを見、山間の小驛には木材が山積せられて居た。而して石峴驛には東洋人絹バルブ會社の工場があり、汪清縣即ち百草溝には鮮人八百戸の移民部落がある。

圖們は朝鮮の南陽驛と圖們江を隔て、相對する國境で京圖線圖佳線即ち新京に到る鐵道と佳木斯に至る鐵道との起點をなし、滿洲國成立後牡丹江市と共に新興都市の一である。現時人口三萬

餘を有し、尙ほ將來の發展を約束付られて居るか鐵道開通以前は灰幕洞と唱へて戸數僅に百數戸の寒村に過ぎなかつたと云ふ。而して此圖佳線の通過する三省の最前端にある間島省は、曾て清韓兩國間に領土紛争問題のあつた關係にも依るであろうか、人口總數六十四萬人中其の七割五分強を朝鮮人で占めて居るのが此の省の異彩である。のみならず鮮民の尙ほ進んで圖佳線に沿ふて流れ込むのは地理上自然の趨勢で、私が途上の觸目にも一坪の水溜りあれば必ずそこに鮮民の水田經營が行はれて居ると云ふ状態であるから、地方行政の責あるものは餘程此點に留意して善處せられねばならぬと思ふ。

間島省は面積約三萬平方軒。域内山岳重疊して森林に富み、其材積包藏量は百億石と稱せられて居るが、地味肥沃の可能耕地も亦た少なからず、其總面積約八十二萬畝で、此の内、既耕地三十萬畝、未耕地四十五萬畝であるので、現住民の耕地擴張を認めても尙ほ優に六萬五千戸(一戸當六畝)の新移民を收容し得る譯である。省當局は此方針に向ひ既に着々鮮民移住の計畫を實行して居る



掘發の城京東



碑の掘發



見所線沿線住園



圖門磚



(洲瀆が側右てつ向)橋鐵際國

港津清



景光の積野油推



と聞く。尙ほ間島省の公署所在地は現在延吉(局子街)である。

私は是れで此の圖佳線の踏査を終つた。曾ては左程の關心を持つて居なかつたが或る友人が「滿洲事變後に於ける鐵道の發達は驚異的であるうち本線の如きは實に其功果其意義に於て全線に最たるものである」との言を聞いたが、私は今にして始めて其至論なるを體驗したのである、本線は蘇領沿海州に對する國防上の價値は勿論、北滿の心臟である松花江と裏日本の門戸を成す羅津港とを維ぎ、中間に廣博なる資源を藏する處女地を有する處に我大和民族が大陸發展に資する發祥地と謂つて善いのである。私は此計畫を建てられ及び此起業に従事せられた人々の功績を歎賞して止まぬのである。

此の日我等は南陽驛にて換車し會寧、輸城を経て夜半清津に着き國際ホテルに入る。

私は此行、圖佳線の終りのくくりを成す羅津港を見ざるを遺憾とする。羅津は圖們より一六二軒、海上我敦賀に至る八九一軒、昭和八年、朝鮮總督府の委託を受けて滿鐵會社に於て築港工事

を起したもので、工事完成は昭和二十一年の豫定で、完成の曉は九百萬噸の吞吐能力を持つものであるが、現在既に其第一期工事を終へて百萬噸を吞吐する埠頭一基が成就して、人口三萬を有する港町が繁昌して居ると云ふことである。

同三日(日)曇

早起琴平神社山に上る。山は灣の東南に在りて老松林立、彩橋丹亭あり、遙かに咸北の連峰海上の風帆を望み近く清津港の全貌、輸城の平野を俯瞰する景勝の地であつた。蓋し清津が開港場となつたのも既に三十年を経て萬事落付か出來て居るので、久しく無趣味な旅行を續けて來た私には幽谷を出でて喬木に遷るの感かした。現在清津埠頭は吞吐力百萬噸で、水産品の輸出年額は四百餘萬圓に至ると云ふ。尙ほ其の西方に大きな平野を持つので現に三菱會社の製鐵所、東洋紡績、セメント工場等、種々の工業計畫中で將來は北鮮の大工業地として繁榮を來たすであらうと

思はるゝ。現在の人口は四萬三千である。私は魚油製造所、新市街の工事等を観て午前九時清津驛を立つ。

輪城、羅南、鏡城を過ぎて朱乙の温泉がある。朱乙川の溪流に沿ふて環境雅趣に富むと云ふ。城津は清津港の漁港なるに對して木材の積出港であり、又た吉州より惠山鎮に、白岩よりは滿鮮國境の茂山に、茂山より更に古茂山に至る鐵道支線があり、一方は清津に一方は會寧圖們に連結して居る。列車は咸興の邊より夜に入りて元山を夢裡に過ぎ、四日劍拂浪驛に至り夢始めて破れ、早曉の夏景を車窓に眺めて八時京城に入り朝鮮ホテルに朝食を取る。

同四日（月） 晴 酷暑

私はきのう一日を北鮮の事物に接し皇化の難有さをつくづく感受した次第である。凡そ物は眼

前に列べて見て始めて其比較の明瞭する如く朝鮮合邦後僅かに廿餘年、而かも山林、田野、道路、港灣等の整備が私の觸目する限り、北滿とは圖們江一水を界として劃然と明瞭に識別せらるゝのであつた。近來滿洲の地方官が見學の爲め頻りと我本國に來遊するようであるが、寧ろ朝鮮を見學する方が適切でもあり効果もあると思ふのである。

此朝大橋君奉天より近公に贈るべき土産品を護送して當地に來る。依つて休息後相伴ふて朝鮮神社に詣し、それより博文寺、故宮等に巡り午後四時の釜山行き列車で京城を立ち、同夜釜山發の興安丸に搭じて翌朝下關に着く。同船には朝鮮病院に御差遣の東久邇宮妃殿下が御乗船遊ばされて居た。

同五日（火） 雨

此朝神戸水害の詳報を得る。私は展墓を兼ね山本君と萩市に向ひ十一時玉江驛に着き、唐樋町

のともゑホテルに入る。

同六日(水) 曇時々雨

浄國寺、海潮寺に祖先及父母の墓を掃ひ、晩に土井の宅に招かる。

同七日(木) 曇蒸し熱し

此日支那事變一周年に當り市民緊肅。中村中將より勤王館建設に就ての談あり。

同八日(金) 大雨

夜來の降雨で萩市中刻々増水、動もすれば進退兩難に陥る恐れあるので、急に下ノ關に引返すことにし午後三時東萩驛を立つ。驛頭土井夫妻に別れ途中丸驛を過ぐれば此邊降雨の痕もなし。

六時下ノ關に着き山陽ホテルに入る。

同九日(土) 晴

長府町に乃木神社に詣しそれより尊攘堂功山寺を観る。殊に尊攘堂に陳列の先烈遺品中、長府であへなくなられた中山侍従の常用服數點もあつたが市井に用ゆる品にも劣るもので當時侍従の境遇如何を想像して暗涙を禁じ得なかつた。

正午前、上船神戸に向ふ。今夜新月あり島影漁火を糊模の間に望み海風鬢を掃ふの心地は長途の旅塵を洗ふに十分であつた。

同十日(日) 晴

朝神戸に上陸西村旅館に入る。こゝは眼を掩ふの慘狀で辛ふじて楠町に知人の安否を問ひ、勿



權原神宮參拜

旅を終りて



春日神社



萩にて

春日山博文寺



朝鮮神社

勿神戸を去つて破壊堆沙の道路を衝き午後大阪に入り中ノ島の大坂ホテルに投じた。

同 十 一 日 (月) 晴

朝旅館を出て山本君と大和に橿原神宮、春日神社を参拜する。私の郷里萩市に生れたものは皆春日神社の氏子なので私は遠行の時はいつも春日に参拜するのが例である。

同 十 二 日 (火) 晴

朝大阪を立つ。乗客満員で炎暑の時節、車中は芋を洗ふが如し。夕七時大船に着き家人に迎へられて丁度満二ヶ月振りに鎌倉の山居に歸つた。そして山本君は私を送り付けて東京に去り、二三日して哈爾濱に向け歸途に就かれたが私は心から其長途保護の勞を感謝する。了

384
354

雙月旅日記

(非賣品)

昭和十三年十月十日印刷
昭和十三年十月十五日發行

著者兼
發行人

神奈川縣大船町山ノ内
中島眞雄

印刷人

東京市芝區芝浦一ノ二三
單式印刷株式會社
代表者 森下笑吉

發行所

神奈川縣大船町山ノ内
中島眞雄

終

